

# 米独立戦争時のシーパワー(1)

1773

1773年12月、ボストン・ティーパーティー事件の後、激怒した英議会は、暴動の中心のボストン港を封鎖する。

1774年9月、フィラデルフィアで第1回各州連合議会が開かれる。ボストンの知事であった英将ゲージは武断政策をとっていたが、植民地人はこれに反発し、不穏な空気が流れていた。このため英政府はゲージに、植民地人の武器押収を命じる。この行動によって、植民地人は一斉に蜂起した。

ゲージは、コンコルトにボストン市民が武器を貯えていることを知り、これを襲撃しようとしたが、これを察知した米軍との間に1775年4月18日、レキシントンで小競り合いが起こった。

英軍はコンコルトまで進んだが、米軍の抵抗が激しく、ついに退却した。植民地ではこの勝報を聞いて皆が武器をとって集結した。

特にコネチカット州市民のイーサン・アレンは北方シヤンブレイン湖畔の要塞を奪取しようと考え、奇襲によってタイコンデロガ砦を奪取に成功。勢いに乗じて北方のクラウンポイント砦も奪取した。(5月10日)

この日フィラデルフィアでは第2回大陸会議が開かれていたが、この勝報が伝わると、ワシントンを総督に任命する。

一方英将ゲージは、レキシントンの戦いの後、本国からのハウの来援を待っていたが、5月下旬ハウはボストンに到着、兵力約1万となる。ゲージはさっそく行動に出、バンカー・ヒルの要地を占領することを企てた。

激戦となったが(6月16日)米軍は二度まで英軍を撃退。三度目には支え切れず、血路を開いて退却した。敗戦ではあったが、英軍の正規兵とも戦えることを知って、米軍は自信をつけた。

バンカー・ヒルの戦いの後、7月3日にワシントンは1万4千の兵力でケンブリッジに到り、ボストンのゲージと対峙した。

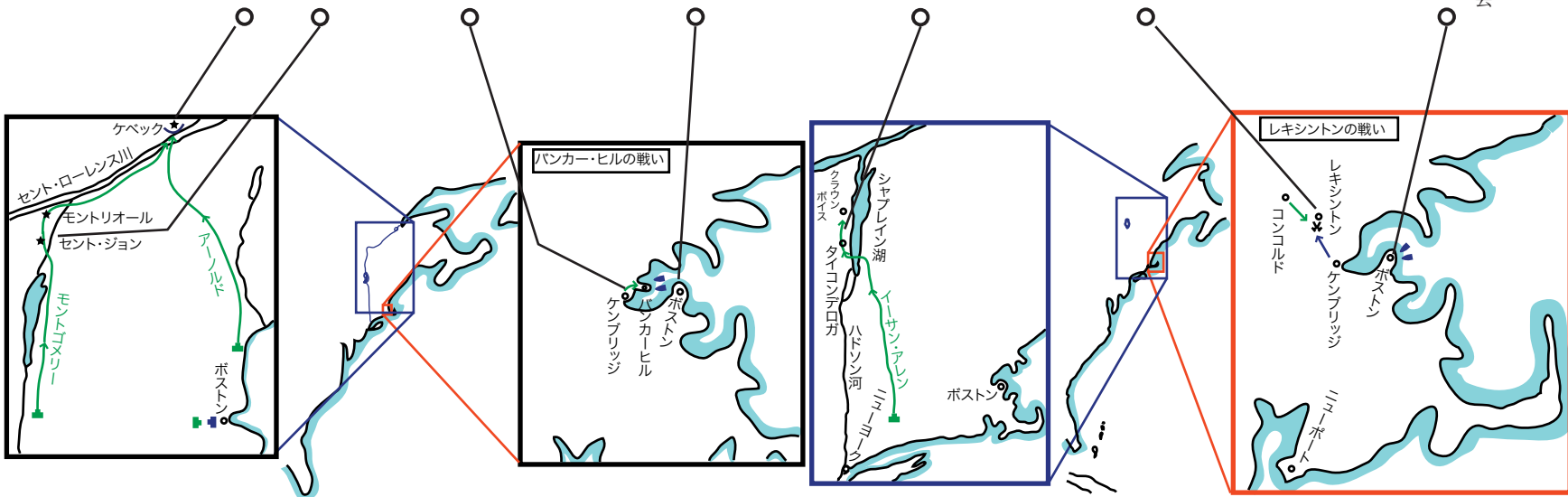
この時、カナダにあった英軍がインディアンを兵力に加えて南下するとの情報があり、ワシントンは直ちにモントゴメリー軍を派遣。モントゴメリー軍は10月、セント・ジョン、モントリオールの両地を占領。

アーノルド大佐の義勇軍も北上してモントゴメリー軍に合流し、11月、ケベックを攻撃した。

しかし攻撃は失敗してモントゴメリーも戦死し、以後この方面では米軍の勢力は振わなかった。

1774

1775



## 米独立戦争時のシーパワー(2)

バンカー・ヒルの戦いの後、ゲージは帰国して、ハウが英側の指揮官となっていた。一方ケンブリッジにあったワシントンは半年余りの間訓練に専念していたが、次第に内部でこれに対する不満が起こつてきたため、準備も整ったとみたワシントンは1776年3月、ボストン総攻撃に着手する。

ワシントンはボストン東方の高地に注目し、奇襲によってこれを占領し、砲台を築く。(3月16日)

英軍はこの制高点奪回のため、戦列艦2〜3隻で奇襲を企てるが、悪天候のため果たさず。

制高点を確保した米軍は、ここからボストンの陸地および港内の艦を砲撃したため、ハウは形勢不利とみてやむなくボストンを放棄、ノヴァスコシアのハリファックスに退却した。

ボストンを占領したワシントンは、英軍は次にニューヨークを作戦区域に選ぶに違いないと判断、先手を打つべくボストンには一隊を防御に残し、自身はニューヨークに急行して4月14日に到着、直ちに市内の防御を固める。

この時期の英側の基本戦略は、  
ハウ兄弟の軍が海からニューヨークを襲い、

バーゴイン軍がカナダからシャブレイン・ルートを南下

これによってハドソン河からニューヨークに至る水路を押さえ、13

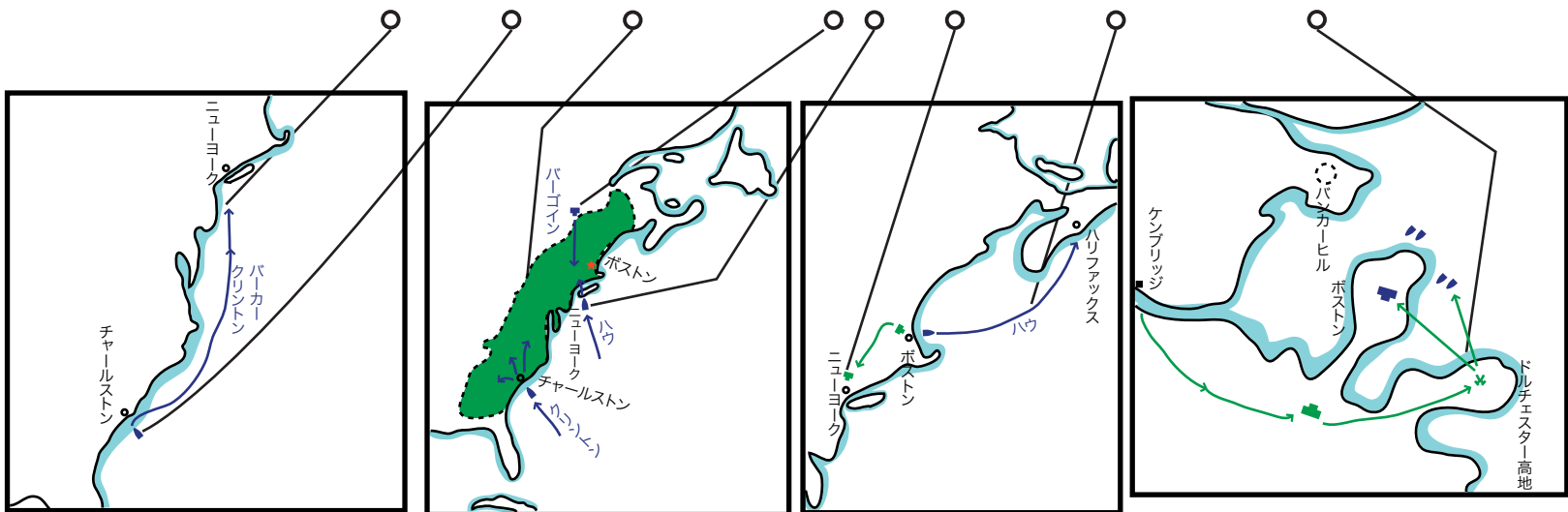
植民地を二つに分断、特に革命の中心であるボストン周辺を南部から切り離してしまう。その一方でクリントンの軍は南

部のチャールストンに上陸、王党派の勢力は比較的強いため、その運動を支援する。

この方針にしたがい、6月にクリントン軍3千は、バーカー提督の指揮する13隻の艦とともにチャールストン沖に到着。

港湾を封鎖して水陸協同での攻撃を行ったが、上陸軍と艦隊は地形有効な協調行動はとることができず、やむを得ず、バーカーとクリントンはニューヨークに向かう。

ボストンの回復、チャールストンの防衛の成功と戦果を上げて、意気あがり、1776年7月4日、大陸会議は独立を宣言。



## 米独立戦争時のシーパワー(3)

7月8日、ハウは、兄ハウ提督の掩護のもと(150隻) ニューヨーク附近のスターテン島にも上陸。

その後、チャールストンから来たクリントン軍と合同、ロングアイランド島にも上陸。

ニューヨーク附近には海上に防材がめぐらされていたが、8月27日、ハウは防材を破壊して艦を侵入させ、その支援のもとにクリントン軍は米側の陣地を突破。

9月になると、クリントン軍は艦隊の援護のもと、ニューヨークの東5キロに上陸。(このころ、ブッシュネルの潜水艦が出動)

この状態を見たワシントンは、9月12日、ニューヨークを退去。北部の高地に據って、抵抗を一ヶ月ほど続けたが、状況はますます悪く、10月26日、北部に向けて退却。

一方シャブレイン湖附近にあった米軍は湖上水軍を建造しており、この年の6月にはすでにセント・ジョンを撤退していたが、イギリス側も湖上水軍を整備しなければならず、10月によく南進を開始し、10月11日から16日まで5日間にわたってシャブレイン湖のヴァルカー島附近で湖上戦となった。

結局アメリカ側の湖上水軍は全滅するが、貴重な4ヶ月を稼ぎ出すことができた。この年の(バーゴイン軍)英軍の前進は、一応ここで停止。

ワシントンを追撃していたハウは、冬期に備えてニューヨークに退き、その帰途ハドソン河の要塞を陥としてこの区域の管制を確実なものにした。

この不利な形勢で米軍には脱走者が多く、当初1万6千だったのがわずか3千となくなってしまい、ワシントンは一旦南のニューアークに退却したが、6千のコーンウォリス軍が追撃してくるため、やむなくフィラデルフィアまで退却。

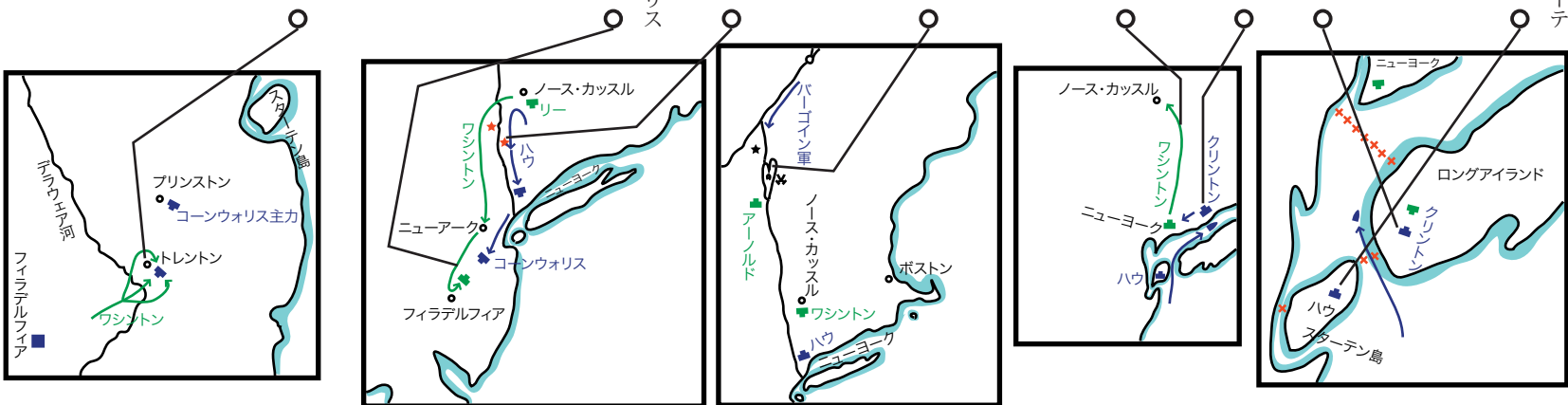
ワシントンは、北のノース・カッスルに残しておいたリーに合同を命じるが、リーは英側の捕虜となってしまった。

ワシントンはこの形勢の中で、士気を鼓舞するため、一勝を挙げる必要を感じた。フィラデルフィアの対岸では、追撃してきたコーンウォリス軍が船の不足でデラウェア河の渡河ができずに対峙していた。

12月25日、クリスマススの日にワシントンは奇襲を決意。トレントンにたった千五百人の英軍支隊は完全に眠りかけており、流水の危険を冒してデラウェア河を渡ったワシントン軍は三方から奇襲。

英軍は大混乱に陥り、千名以上の損害を出したが、米軍の損害はわずか四名だった。

夜明けとともに、ワシントンは再び河を渡ってフィラデルフィアに退却する。この戦勝により、ワシントンの発言力は強まることになった。



# 米独立戦争時のシーパワー(4)

明けて1777年、ワシントンはコーンウォリスにも一撃を加えようとし、トレントンの戦いの後、兵士に数日の休息を与えた後、再びデラウェア河を渡ってトレントンに到る。

コーンウォリスは早速兵を率いてワシントン軍に向かうが、接触は日没近かったため、小競り合いの後、一旦兵を引いた。

ワシントンは翌日の決戦を避けるため、陣中に多くのかがり火をたいて密かに兵を率いて陣を出、間道を通ってプリンストンのコーンウォリス主力軍を奇襲しようとした。

この途中で、コーンウォリスを支援する英支隊に遭遇、ワシントン軍は交戦して二百を捕虜とする。(1月13日)

ワシントン軍には補給が悪化し、行軍が思うにまかせなくなったため、コーンウォリスとの決戦を断念、北方のモーリスタウンで冬営することとした。

ワシントンはコーンウォリスの追撃を予想し、またこの時、英側のスパイが米軍陣中に混入との情報を聞き、これを逆手にとって自軍に関する虚報を流し、コーンウォリスを自重させた。

6月、北部のバーゴイン軍が活動を再開、タイコンデロガが砦を占領(7月6日)さらに7月31日、フォート・エドワードを占領。

また、オンタリオ湖から出発したセント・レジャー大佐の軍は8月6日、オリスカニーに到着。

この間、ワシントンはデラウェア河の先で執拗な抵抗を続け、業を煮やしたハウは7月、ワシントンをたたくためニューヨークから軍を乗船させる。

ちょうどこのころからバーゴイン軍の補給は悪化を始め、8月6日、ベニントンに一隊をさし向けて食料調達をはかるが、民兵に撃退される。

また、セント・レジャー部隊は、アーノルドの奇計に引つかかって、8月22日、反転退却してしまった。

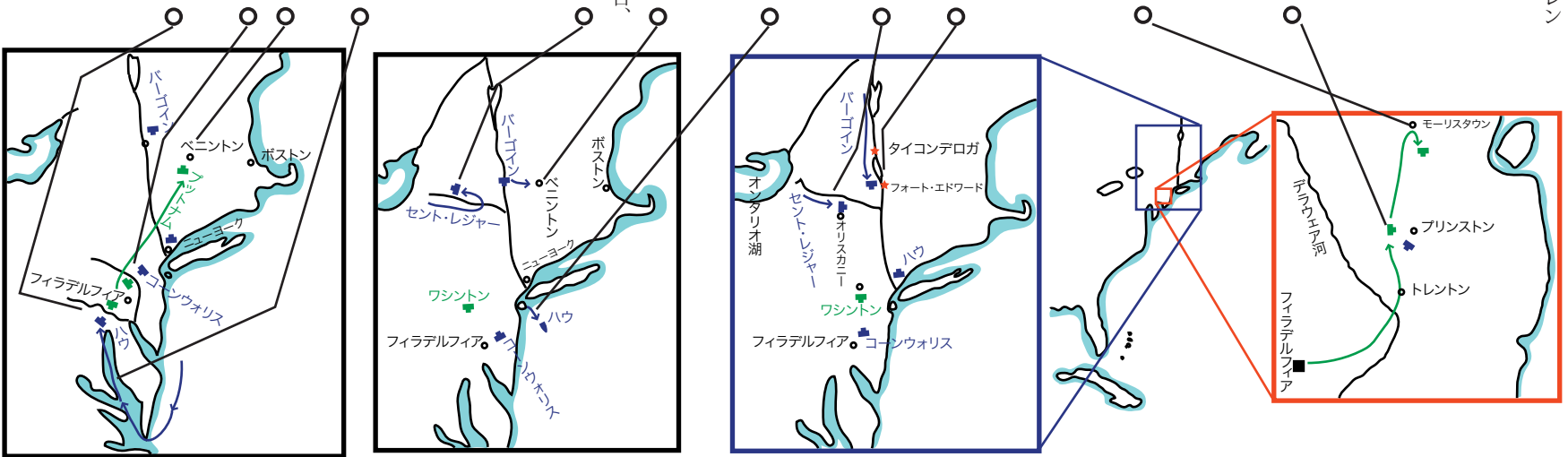
前進不能となったバーゴインはハウに救援を求めるが、この時すでにハウはニューヨークにおらず、救援を出すことはできなかった。やむなくバーゴインは9月14日、米軍に戦いを挑み、一度は米軍を撃退した(第一回サラトガ戦)

9月26日、ハウは大陸会議の中心地であるフィラデルフィアに上陸、米側に心理的ショックを与えようとした。

ワシントンはポストンを衝かれることを恐れていたが、ハウの目標がポストンではないことを知り、プットナムの軍を北方戦場のベニントンに派遣。

防備には、一軍にデラウェア河を守り、コーンウォリス軍を防ぎ、自身は4千でブランデーワイン河の線を守り、ハウの軍を防ぐ配備をとった。

しかし兵力の不利はどうにもならず、敗退を続けてフィラデルフィアを占領される。大陸会議はホルティモアに移動。



# 米独立戦争時のシーパワー(5)

ニューヨーク守護のクリントン軍は、米軍の牽制にあつてすでに苦境にあつたが、10月3日、北部に分遣隊を派遣したが、前進は困難だった。この間後退しつつハウ軍を防ぐワシントン軍は、10月4日、小規模な奇襲を行って一勝を上げたが、劣勢をばん回するには到らなかった。バーゴイン軍は、もはやサラトガで動きがつかず、定員は5000を割っていた。これを包囲する米軍は9000に達し、ゲーツ・ブットナムの指揮で10月17日、第2回サラトガの決戦となる。

この戦いでバーゴイン軍は全員降伏し、結局北アメリカにある英軍の4分の1が壊滅したことになる。早速勝報を乗せた船がボストンを出帆する。

ハウ軍に抵抗していたワシントン軍は、退却を続け、11月、ヴァレー・フォージまで退いて冬営に入る。

サラトガの勝報を乗せた船は12月2日、フランスに到着し、12月中旬、フランス国王は独立承認の意志を明らかにする。この間にはベンジャミン・フランクリンの努力があつた。

翌1778年2月6日、米仏間で正式に同盟が成立する。3月13日、フランスはイギリスにこれを通告、4月、両国は国交断絶し、交戦状態に入る。アメリカではこれを聞き、意気は大いに上がった。(なお、このころアメリカの英軍ではハウが帰国してクリントンが交代)

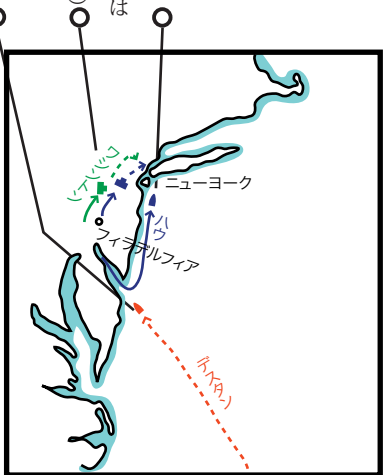
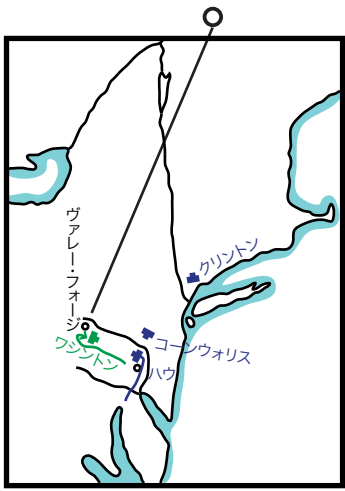
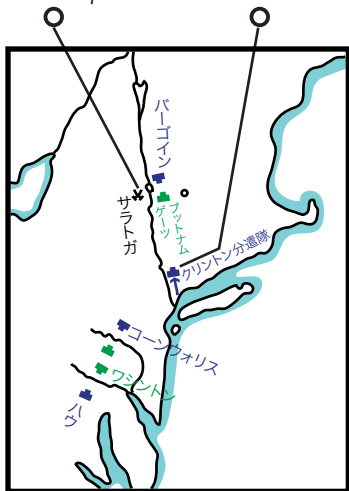
4月15日、デスタンは12隻の戦列艦と5隻のフリゲートを率いてツーロンを出港。  
しかしデスタンは多くの時間を訓練に費し、進出は非常に遅く、目的地デラウェア岬への到着は2月半から3月後の7月8日であつた。

一方このころ、アメリカにあつた英軍は、主力がニューヨークにあり、一部がフィラデルフィアにあつた。そして海上からの攻撃に対して、ニューヨークの防備は固かつたが、フィラデルフィアはぜい弱であつた。

ハウ提督は、デスタン艦隊の接近を知ると、直ちに艦隊と輸送船をデラウェア湾に集結させて、軍需品を積みこんだ。そして陸軍がニューヨークへ向けて出発すると同時に、ハウは6月18日、ニューヨークへ向けて出航。

陸軍は、ワシントン部隊に追撃されながらも(モンマスの戦い)、7月5日まではニューヨークに到着。(追ってきたワシントン部隊は、ホワイト・ブレインスの布陣)デスタン艦隊のデラウェア湾頭への到着は、3日後の7月8日であり、イギリス軍の撤退が完全に終了した後だった。

本国周辺では7月28日、ウエサン島沖で英仏両艦隊の最初の海戦が起こつた。



## 米独立戦争時のシーパワー(6)

ウェサン沖海戦と同じ7月28日、ハウはデスタン艦隊がロード・アイランドに向かっているとの報に接し、出撃準備にとりかかる。

ワシントンと打ち合わせた上でニューポートに向かったデスタンは7月29日到着。湾内にいた6隻の英艦隊は、撃沈、あるいは自沈によって全滅。

デスタンはさらにワシントンと協同で、ニューポートに立てこもっている6千のイギリス軍を攻撃しようとした。

しかし出撃してきたハウ艦隊が到着し、デスタンは直ちに抜錨し、ナラガンセット湾から出る。ハウの兵力はデスタンの三分の二程度であったが、両艦隊は位置を争って艦隊運動を続けたが8月12日、暴風によって両艦隊は吹き散らされた。

フランス艦隊は一時はナラガンセット湾に戻ったが、損害のことを考え、またちようどこの時、イギリス側の増援兵が到着するとこの情報を得たため、8月21日、ボストンへ向けて出航。

ハウは、ニューヨークに帰投する。ロード・アイランドはイギリス側の手に残されることとなり、イギリスはその後1年間保持する。

ハウは艦隊の修理を行ない、ボストンに在るデスタンに戦いを挑む。フランス側の兵力のほうが上だったが、戦いを避けて湾内から出ず、戦いにはならなかった。

その後、イギリス本国からバイロン提督指揮の増援艦隊が到着、ハウは帰国する。

バイロンは、ボストン沖でデスタン艦隊の監視を続ける。

一方西インドでは、フランスの総督が9月2日、ドミニカ島を奪取。

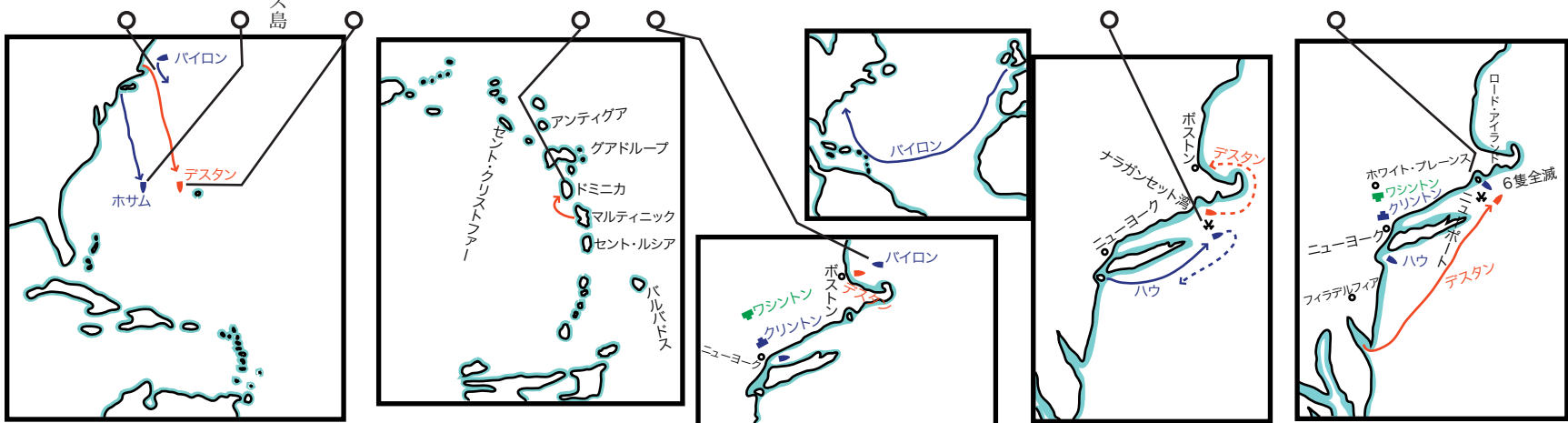
元来、西インド海域は8月から10月までの時期はハリケーンが多いが、それを過ぎれば冬期でも風は暖かく波は静かであった。一方北米東岸は冬には波が荒かった。それゆえ、双方ともこの時期には作戦海域を西インドに移す。

デスタンは艦艇の修理を完了し、11月4日、全部隊を率いてマルティニックに向け出港(12隻)

同じ日にホサム代将の指揮する5隻の戦列艦は、クリントン軍から引き抜かれた5000の陸兵を搭載する輸送船団とともに、ニューヨークからバルバドス島へ向かう。

また、デスタン艦隊に逃げられたことを知ったバイロン提督の艦隊も、西インド諸島へ向かう。

(この間、米本土ではアーノルドの裏切り、ワイオミング事件起こる。)



# ウエサン沖海戦（第1回）

1778年7月28日

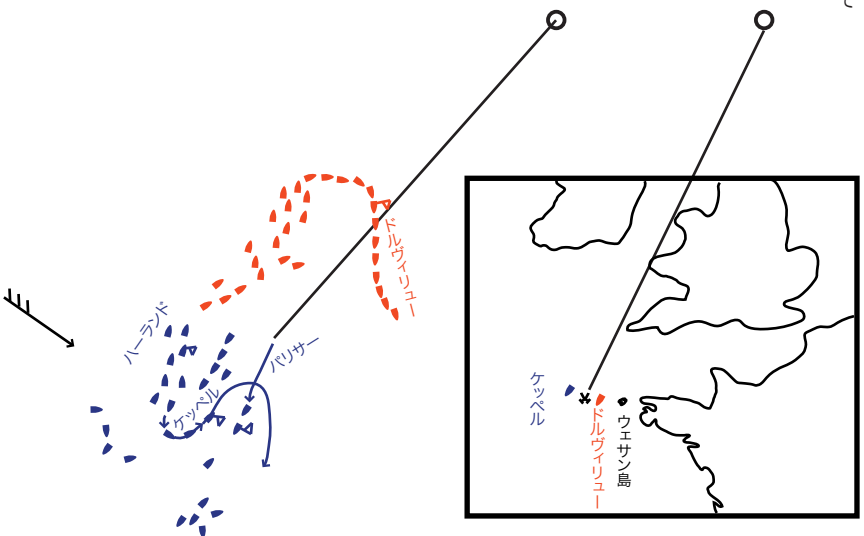
1778年7月28日、英海峡艦隊司令官ケツペルは30隻を率いてウエサン島沖で、ドルヴィリユーの指揮するフランス艦隊に遭遇した。

フランス艦隊も30隻で、両艦隊とも同数だった。ケツペルは決戦を企図したが、イギリス側の第三戦隊（パリサー戦隊）が集結せず、積極的な攻撃には出られなかった。

一方フランス艦隊のドルヴィリユーは、完全な体勢のもとでしか戦うつもりはなかったため、こちらも積極的な行動には出ず、結局決戦は成立せず、両艦隊ともほとんど損害を出さずに物分かれに終わって、両艦隊ともそれぞれの港に帰投した。

海戦の結果をめぐって英国内では激論となり、ケツペルとパリサーのどちらが正しいかについて政党間の論争にまで発展した。

一方フランス海軍はこの戦いで自信を深め、米独立戦争への介入に関して多大な影響を与えた。



# セント・ルシア沖海戦

1778年12月5日

デスタンは、暴風による損害のため、ボストンにおり、英側のバイロンがこれを封鎖していた。

修理を終えたデスタンは、全部隊を率いてマルティニックに向けて出航する。(11月4日)

デスタンに逃げられたことを知ったバイロンは、バルバトスで主隊に合同しようとしたが、同じ11月4日、イギリスのホサム代将は、セント・ルシア攻略のため5千の陸兵を載せた59隻の輸送船を、5隻の戦列艦で護衛してニューヨークを出航。

途中暴風に会い、フランス艦隊は大きな損傷を受け、損害を受けなかった12隻は11月9日、マルティニックに到着した。

ホサムの輸送船団は、11月10日にバルバトスに到着。

バルバトスの指揮官バーリントン提督は、軍隊を船内にとどめたまま、11月12日朝、セント・ルシアに向けて出航し、13日午後、同地に投錨。

バーリントンはその日のうちに軍隊の半分を揚陸。翌日残りの半分を揚陸した後、バーリントンはもっと良い港に移動したが、その時デスタンの艦隊(彼は11月9日にマルティニックに到着していた)が出現した。

バーリントンは輸送船団をそこへ移動させるつもりだったが

が、デスタンの出現でそれを中止した。(デスタンは英艦隊の倍以上であった)

デスタンは、イギリス艦隊の隊列に沿って北から南へ二回航過し、遠距離射撃を行ったが、投錨はしなかった。

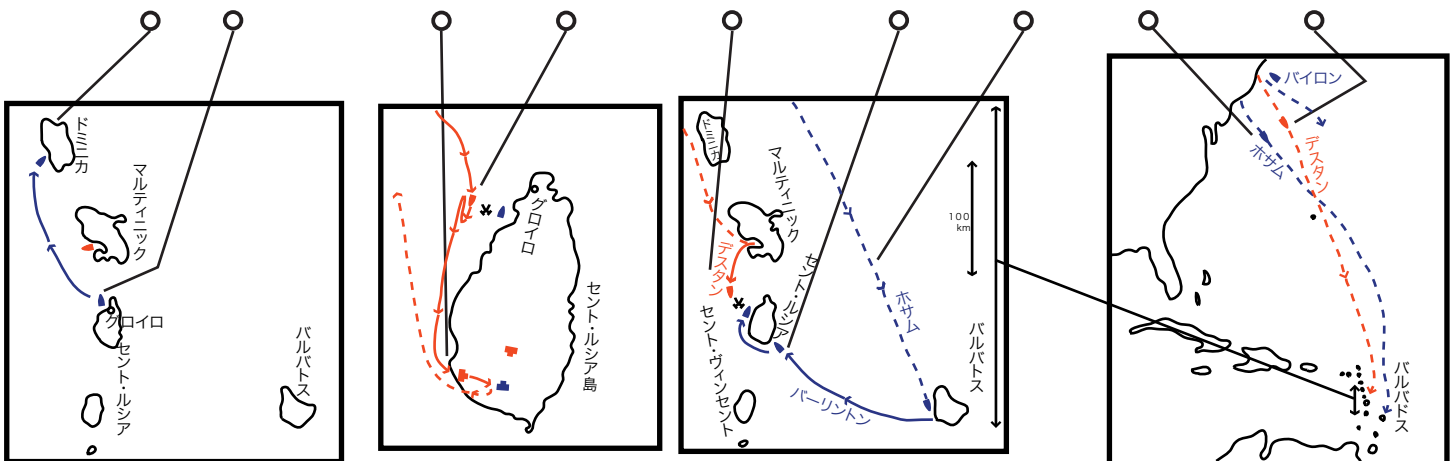
デスタンは、英艦隊攻撃を断念したため、この海戦は非決定的なまま物分かれとなった。デスタンは別の湾に向かい、陸軍を上陸させてイギリス側の陣地を強襲させたが、これも失敗した。

(この時デスタンは、バイロンが来るとの情報を受ける)

デスタンはマルティニックに後退し、そのため、セント・ルシア島内陸部に駆逐されていたフランス軍守備隊は降伏した。

セント・ルシア島北端のグロイロは、マルティニック監視に最適であった。

そしてイギリス軍は、この有利な立場を生かし、ドミニカ島(9月2日にフランスに奪取されていた)を奪回することに成功した。





# グレナダの海戦

1779年7月6日

1779年、バイロンは商戦護衛のため大西洋に出る。それを聞いたデスタンは、小さな遠征部隊をセント・ヴィンセントに派遣、6月16日、難なくこれを占領。

6月30日、続いてデスタンはバルバドス攻略を企てるが、風向きが悪く、目標を変更、グレナダを攻略する。

7月2日、ジョージタウン沖に投錨、7月7日、守護隊は降伏し、デスタンはグレナダを占領。

一方7月1日に護衛任務を終えたバイロンは、これを聞いて直ちにセント・クリストファーを出航、グレナダに向かう。

連列艦21隻と輸送船団を率いたバイロンは、グレナダ前面にフランス艦隊ありとの確報を得て、7月6日払暁グレイダ島の北西端を通過。

デスタンは、その前日、バイロン艦隊の接近を知ったが、風下に流されることを恐れてそのまま停泊していた。両艦隊は互いに視認し、戦闘に入る。

フランス艦隊は28隻で、イギリス側より優勢だったが、かたまっていたためバイロンはその数がわからず、バイロンは劣勢にも関わらず、総進撃を命令。

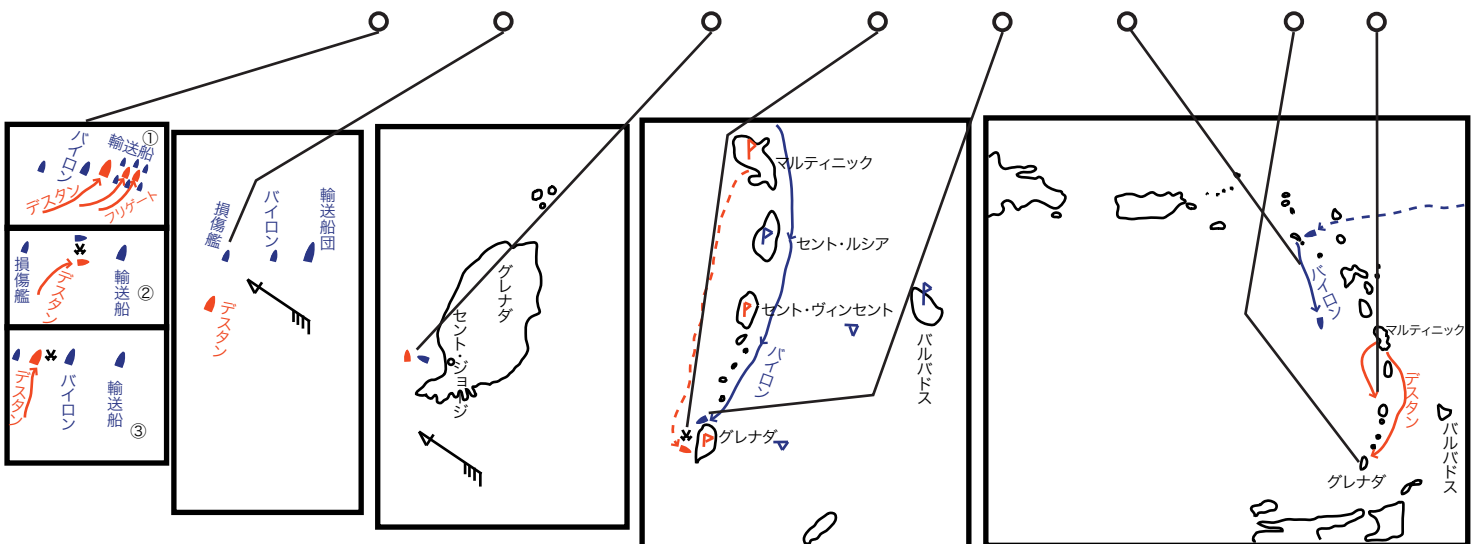
これに対し、デスタンは風向きの不利のため、積極的な攻撃に出ず、数の優位をたのんで守勢をとった。

このため、バイロン艦隊のうち最初に戦闘に入った何隻かは大きな損害を受け、行動に支障をきたしていた。

デスタンは、このバイロン船隊の不利な態勢に乗ずることができたはずだが、それをしなかった。

(このときデスタンがとりえた方法は、以下の三つである。)

結局戦闘は非決定的なまま終わり、イギリス側はセント・クリストファーに、フランス側はグレナダのジョージ・タウンに、それぞれ引き上げた。



# セント・ヴィンセント岬の月光海戦

1780  
年1月16日

1780年、1月、ロドネー艦隊は西インドへ向けて出航する。そのさい、東インド向けの商船隊をスペイン沖まで護衛すること、

ミノルカ

ジブラルタル

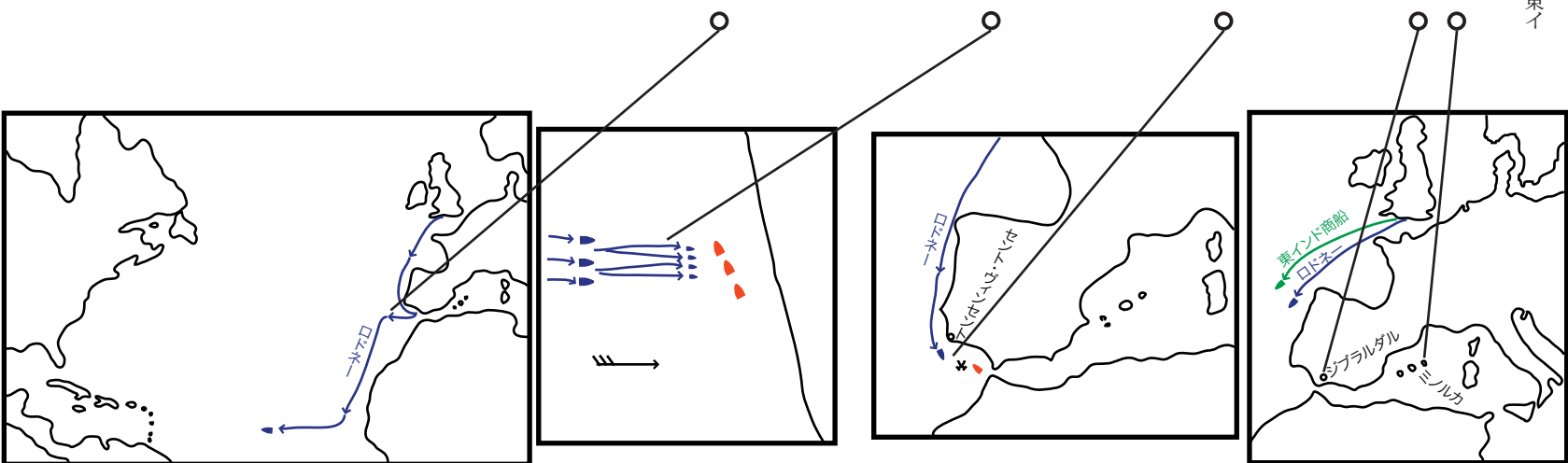
の籠城軍に補給を行なう任務を与えられていた。

ロドネー艦隊はジブラルタル沖でスペイン艦隊を視認。日没間近であったため、ロドネー艦隊としては、最低速艦の速度で戦列を保って接近した場合、接触は日没後になることは確実であった。

そのためロドネーは、戦闘規則に反して全軍突撃を命令。ロドネー艦隊のうちの四艦は、船底銅版被覆のために速力が出たため、艦隊から飛び出してスペイン艦隊に突入。

風下側に海岸をひかえ、激しい風浪の中でランガラ提督のスペイン艦隊は戦闘に引きこまれ、やがてロドネー本隊との間で夜戦となった。

この戦闘でスペイン艦隊は全滅したため、ジブラルタルとミノルカの補給は回復された。ロドネーはそのまま西インド諸島に向かった。



# マルティニック海戦

1780  
年1月17日

1780年3月22日、新任のフランス西インド艦隊司令長官ド・ギシエンがマルティニック島に到着。直ちに22隻を率いてセント・ルシア攻略に向かう。

しかしセント・ルシアの英守備隊の守りは固く、ド・ギシエンはマルティニックに帰航する。(セント・ルシアにはハイト・パーカーの16隻がいた。)

一方セント・ルシアには3月27日、新任のイギリス西インド艦隊司令長官ロドネーが到着。

ロドネーはハイト・パーカーと合流した。

ロドネー到着から3週間後の4月17日、ド・ギシエン

の率いるフランス艦隊は、マルティニック・ドミニカ間の海峡を航行中、南東方にロドネーの艦隊を発見。

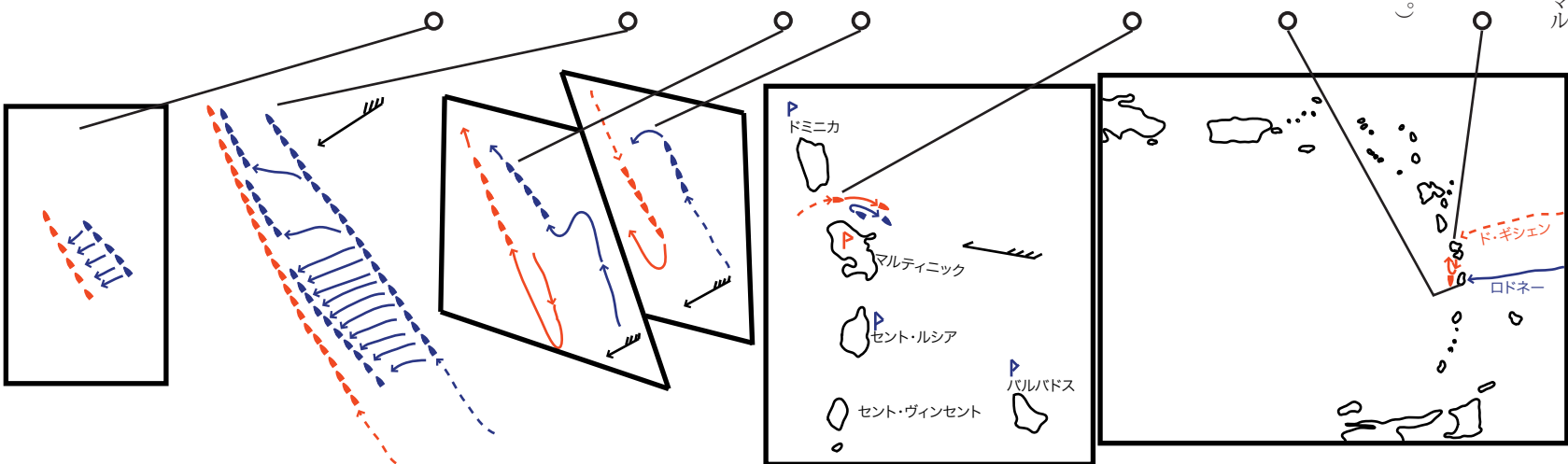
両者は風上側の位置を争って丸一日艦隊運動を行ない、ついにロドネーが風上側についた。なお、兵力はロドネーは21隻、ド・ギシエンは23隻だった。

両艦隊は最初反航戦となり、続いてロドネーは敵の後尾を衝くべく、回頭接近を開始したが、ド・ギシエンはこれを避けて反転した。

ロドネーは直ちにこれに対して反応し、敵と同航となるように回頭し、両軍の戦列は鋭角的な接近コースとなった。

ロドネーは再び敵の後尾を衝くべく、全艦に突撃を命じる。ロドネーは最寄りの敵艦を攻撃せよとの意味でこれを命じたが、各艦長はこれを理解せず、当時の規則にしたがって自分と同じ艦番号の艦を求めて向かっていった。

このため、戦列の前方は分裂し、後尾を衝くロドネーの企図は失敗に終わった。しかしロドネーはその旗艦をもって敵に猛撃を加えて大損害を与えた。全体的に見れば、イギリス軍に不利な結果となった。(なお、ロドネーの企図は以下の通り)



# チエサピーク海戦（第1次）

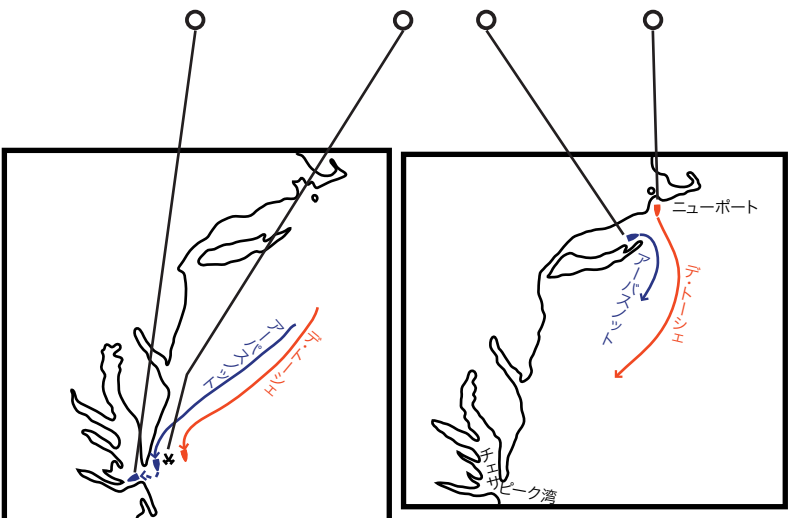
1781年3月6日

1781年、ラファイエット指揮下の部隊がヴァージニアに派遣された。そのためチエサピーク湾水域の制海権確保の必要が生じ、ラファイエット部隊に呼応して3月8日、ニューポートにあったフランス艦隊8隻が、デ・トーシエの指揮でチエサピーク湾に向かう。イギリス艦隊はロング・アイランド東端のガーディナー湾に停泊していたが、アーバスノット提督は哨戒中のフリーゲート艦からフランス艦隊の出撃を聞き、36時間後の10日朝、フランス艦隊追撃のため出撃。

チエサピーク湾の岬の少し外側で両艦隊は互いに視認し、交戦に入る。

両艦隊の兵力はいずれも8隻で、イギリス艦隊が前方に出ているが、イギリス艦隊には90門艦が一隻含まれているのに対し、フランス側の一隻は大型フリーゲート艦でしかなかった。

海戦の結果は非決定的なものに終わり、アーバスノットは湾内に入ってアーノルドと合同する。



# マルティニック沖海戦 (第2回)

1781年4月9日

1781年3月末、ド・グラスは26隻の戦列艦と大船団を率いてブレストから出撃。途中、アゾレス諸島沖で、5隻がシユフランの指揮下に東インドに向けて分離。

ド・グラスは、4月28日、マルティニック島の見えるところまで達した。

このころフッド提督は、マルティニック島のフォート・ロイヤルを封鎖していた。

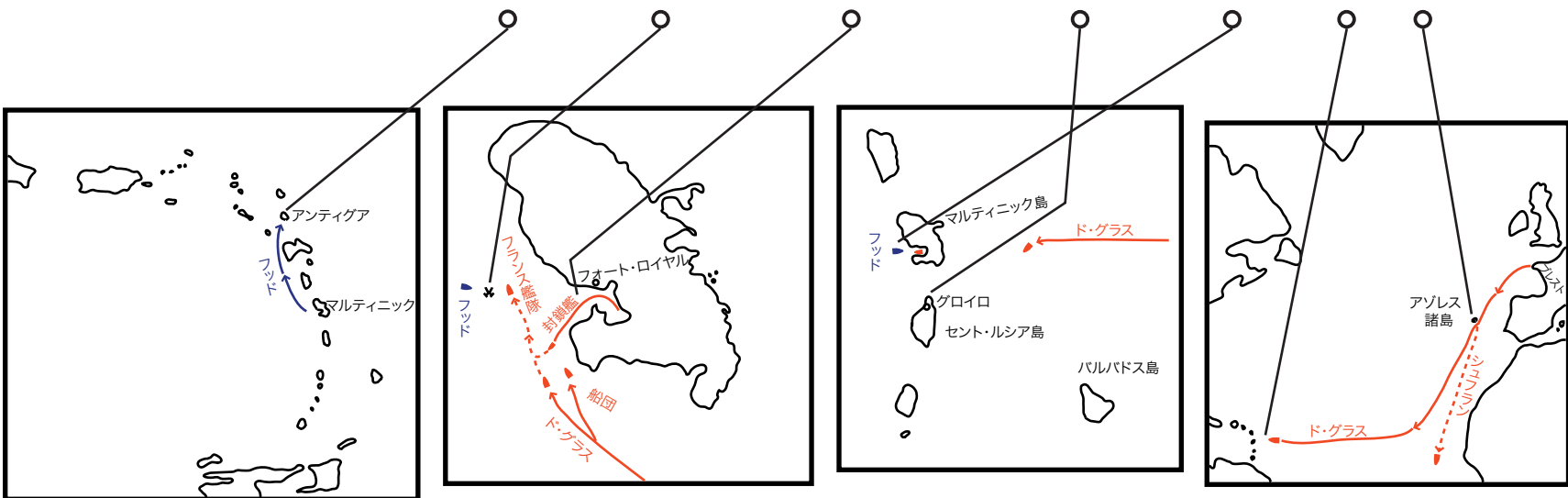
このころフォート・ロイヤルには四隻のフランス戦列艦があり、フッドの目的は、この四隻がド・グラス艦隊と合同するのを阻止すること、およびド・グラス艦隊がフッド艦隊とグロイロの中間に入るのを阻止することであった。

しかし風が弱いうえ潮流が速く、流されたフッドはこれらを達成できなかった。

ド・グラスは29日に水道を通過し、フォート・ロイヤルに向かう。ド・グラスは船団を島と艦隊の間に置き、一方フォート・ロイヤルの四艦は出港してド・グラス艦隊に合流した。

フランス側はこれで24隻、イギリス側は18隻で、しかもフランス側は風上にあつた。両軍は砲火を交えたが、ド・グラスはこれほど有利な条件にあるにもかかわらず、決戦に出ずに遠距離から砲撃するにとどまった。

翌30日、船団をフォート・ロイヤルに入れたド・グラスはフッド追撃を企てるが、フッド艦隊のほうが速力が出たため、フッドは離脱に成功。フッドはアンティグア島付近でロドネーと合流。



# チエサピーク沖海戦 (第2回)

1781年9月5日

ヨークタウンにあるコーンウォリス軍を攻撃するため、ワシントンとロサンボーはチエサピーク湾附近に移動。

附近の制海権を得るため、ワシントンはド・グラスに協力を要請。当時エスパニョラ島のフランス岬沖に投錨していたド・グラスは、フリゲート艦からこの至急報を受け、直ちにこの計画を承認、利用しうるすべての艦を率いてチエサピークに向かった。

一方ロドネーはド・グラスの出撃を知り、フッドに麾下の14隻の戦列艦を率いて北アメリカに向かわせる。

(なお、彼自身は病気のためイギリスに向けて出港する)

フランスの第二戦隊はド・バラスが率いていたが、彼は8月26日、戦列艦8隻と18隻の船団をもって、ド・グラスと合流するためニューポートより出撃。フットの艦隊は途中でド・グラスの艦隊を追い越してしまい、8月27日にチエサピーク湾に入った。(不運にも)

しかし湾内を搜索しても何もなかったため、ド・グラスがもう一つの目標として選ぶ可能性のあるニューヨークへ向かった。

フッドはニューヨークで、戦列艦5隻を率いるグレーヴスに会った。グレーヴスの方が先任であったため、フッドはグレーヴスの指揮下に入る。

グレーヴスはド・グラス艦隊については知らなかったが、ド・バラスの出撃については知っており、ド・バラスがド・グラスに合流するのを阻止するため、8月31日、ニューヨークを出撃。

しかしこの1日前の8月30日(フッドの到着より3日後に当たるが)ド・グラスは28隻の戦列艦と3千名の陸軍を率いてチエサピークに入港していた。そして9月5日、グレーヴス艦隊がチエサピークに接近、海戦となる。

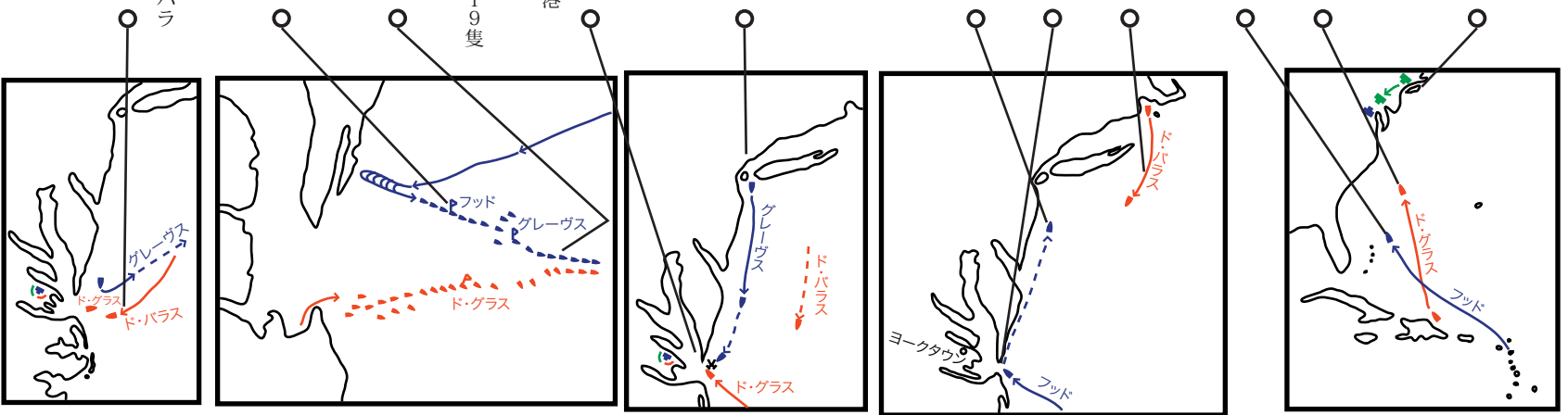
フランスのフリゲートからイギリス艦隊の接近を知ったド・グラスは全艦に出港を命じる。風向きが悪くて、艦隊の出港には時間がかかった。

一方グレーヴスは、ド・グラスを発見して驚き、ド・グラスの24隻に対して19隻の劣勢にもかかわらず、14時15分、一斉に東に回頭して、前衛部隊同志がまぎれ交戦に入る。(15時46分)

しかしグレーヴスがこのように正攻法で攻撃に出たため、フランス側は体勢を整える時間の余裕があった。そしてちょうどこのころ風が落ちてしまったため、フッド隊の7隻はなかなか戦闘に加われなかった。

戦闘は日没まで続いたが、イギリス側は三隻が大破し、戦場から退く。グレーヴスは翌日戦闘を再開するつもりであったが、翌日は風がなく、続く3日はド・グラスを捕提できなかった。一方ド・グラスは、9月10日、迂回してきたド・バラスと合流に成功。

二倍近い兵力の差ができたのを認めたグレーヴスは、9月13日、やむを得ず退却、ヨークタウン救援の望みは絶えた。



# ウエサン沖海戦（第2回）

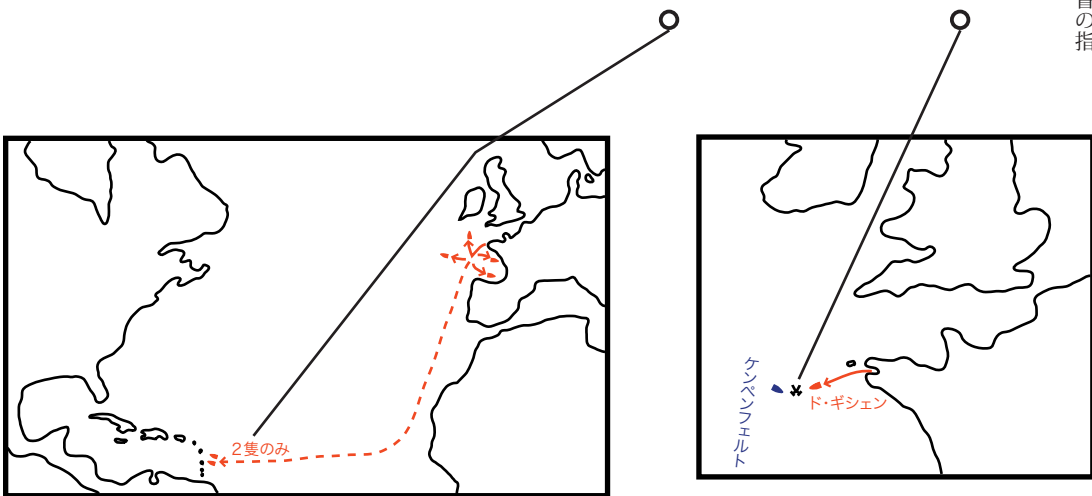
1781年12月12日

1781年12月、西インドのド・グラス救援のため、ド・ギシエン提督の指揮する大輸送船団はブレストを進発。

これに対してイギリス側は、ケベンフェルト提督の適切な行動により、これを洋上で捕提。撃破することに成功した。

損害を受けたフランス艦隊は、さらにその後爆風雨に遭遇し、その際のド・ギシエンの拙劣な管理によってますます大きな損害を受けて、艦隊は離散した。

結局西インド諸島にたどり着いたのはわずか2隻に過ぎず、西インドにおけるド・グラスの立場を低下させることになった。



# セント・クリストファー（セント・キッツ）海戦

1782年1月5日

ド・グラス提督は、優勢にある艦隊をもって海島の占領を行な  
おうと、1782年1月、戦列艦29隻、陸兵8千でマルティニックのフォート・  
ロイヤルを出港、セント・クリストファー島に向かう。

当時セント・クリストファーの英守備隊は約6百であった。フランス兵  
8千はバセッテルに上陸し、直ちに攻撃を開始した。

この時フッド提督は22隻でアンティグア島にあったが、風上か  
ら急襲すれば勝つチャンスありと考えて出撃。

しかしフッド艦隊の接近はド・グラスに探知されド・グラスは  
碇泊地から出港を命ずる。

フッドは奇襲の望みは絶たれたものの、フランス艦隊を索制して  
有利な立場に立ち、ロドネーの本国からの到着を待とうと考える。

ド・グラスはフッド艦隊に向かっていったが、フッドは巧みにこれを  
避け、ド・グラスに自艦隊の後尾を追跡させた。

そして機を見てフッドは急速に反転し、碇泊地に入ってし  
まった。

フッドは凸形の陣形を作って碇泊し、両翼を陸地に託する  
とともに、フランス艦隊を上陸軍から遮断した。

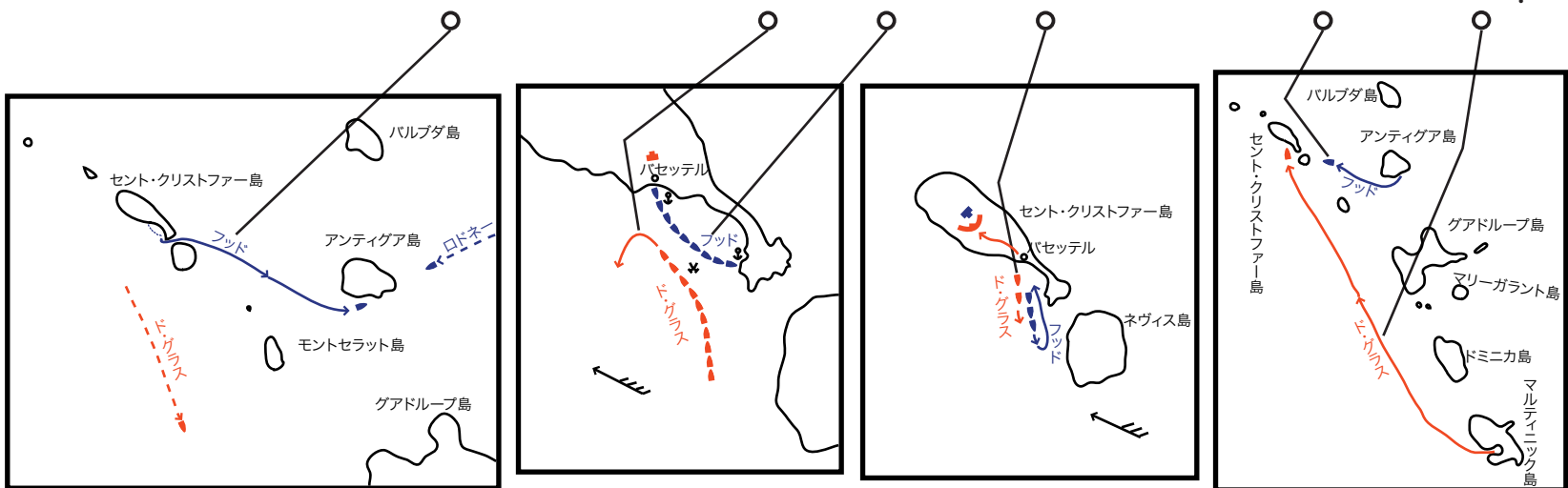
1月25日、ド・グラスは攻撃のためフッドの隊列に接近したが、イ  
ギリス側の舷側射撃により大損害を受け、接近不可能とな  
った。

この状態でフッドは約3週間、その位置を保持した。この時、フ  
ランス側の、本国よりの増援艦隊は、ケンペンフェルト提督に破られ  
たのに対し、ロドネー艦隊は西インドに接近しつつあった。

ド・グラスは、ロドネーの到着前に決着をつけようと、海陸両側  
で攻撃を強化し、2月13日には英守備兵を降した。

もはやフッドには、セント・クリストファーにとどまる理由がなくなった  
ため、密かに錨鎖を切断し、その位置に灯火を点置して敵を  
欺き、夜に乗じて出港、脱出に成功した。

フッドはアンティグアに帰投、間もなくロドネーと合同した。これ  
によって西インドではイギリスの勢力が優位となり、ド・グラスはセ  
ント・クリストファーを去ってマルティニックに帰投する。





# サドラスの海戦

1782年2月7日

# プロヴィデンの海戦

1782年4月2日

英提督ヒューズは東インド艦隊司令官としてインドにあった

が、英蘭開戦（1780年12月20日）以来機会を狙い、1782年1月、オランダ領トリンコマリを攻略。

ヒューズは奪取に成功したが、防備はまだ完全ではなかったため、彼はマドラスに碇泊していた。

フランスもインド方面における勢力の回復を狙い、1781年12月にドルベス提督のフランス艦隊はコロマンデル海岸に進出して通商破壊活動を行っていた。

一時はトリンコマリ沖まで進出したが、攻略には至らず、そのうちトルベスの急死によりシュフランが指揮をとる。

シュフランはフランス側の根拠地としてどうしてもトリンコマリが必要と考え、1782年2月、12隻で攻略に向かう。

マドラスにあったヒューズはこれを見て直ちに9隻で出撃、2月16日にセイロン北東海上で接触、翌17日交戦する。

戦いは非決定的なまま終わったが、全体としてフランス側が優勢で、両軍の死傷はともに120名程度だった。戦闘後英艦隊はトリンコマリに、フランス艦隊はボンディシェリーに入港して艦隊の修理を行なう。

(以上サドラスの海戦)

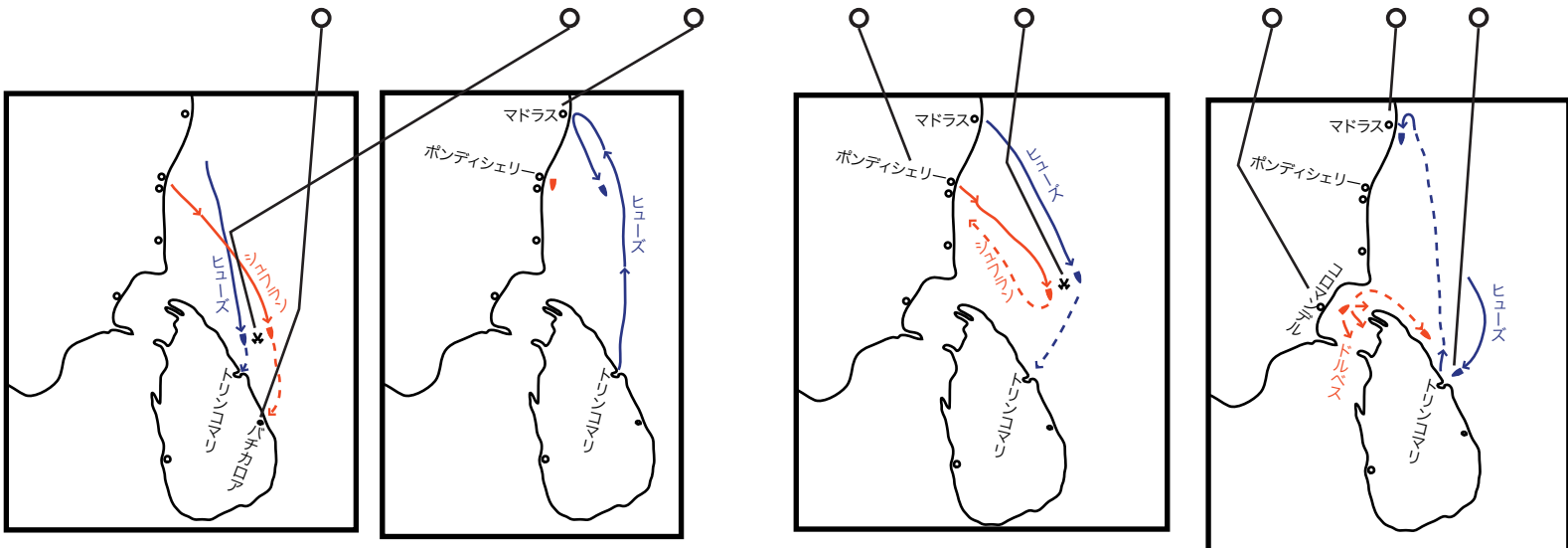
ヒューズは、トリンコマリの兵資が十分でなかったため、3月、再びマドラスに回航、兵士と軍需品を搭載してトリンコマリに向かう。

ボンディシェリーにあったシュフランはこれを知り、カッダロア攻略のための陸兵を揚陸した後、自らは12隻でヒューズを追撃、4月11日、トリンコマリ北東50カイリで視認。翌12日戦闘に入る。

戦闘は12日より19日までの8日間にわたって行なわれ、シュフランはヒューズを挟撃しようとはかり、一方11隻のヒューズは決戦を回避しようとしたため、英側は大きな損害を出しながらこの戦いは決戦には至らなかった。

戦闘中止後、英艦隊はトリンコマリに入り、フランス艦隊はその南のバラカロアに投錨。

(以上プロヴィデンの海戦)



# ドミニカ海戦（セイントツ沖海戦）

1782年4月9日～4月12日

セント・クリストファーの海戦後、ド・グラス艦隊はマルティニックにあって、その兵力は戦列艦36隻、小船26隻、計62隻であった。一方ロドネーの兵力は戦列艦36隻、小艦19隻の、計55隻であり、アンティグア島よりセント・ルシア島に移動していた。この時期、ド・グラスは、ハイチ島サント・ドミンゴのスペイン艦隊と合同してジャマイカを攻略することを計画しており、イギリス側はこれを阻止するため警戒体制にあった。

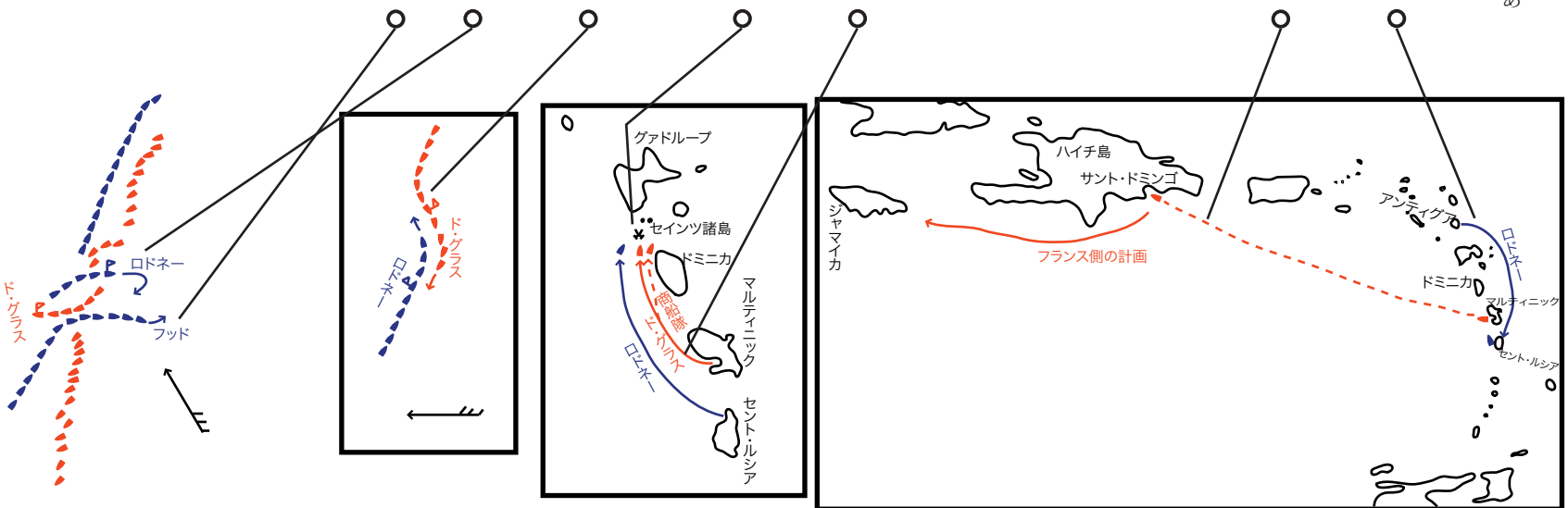
1782年4月8日、フランス艦隊は本国に向かう商船隊150隻を護衛しつつマルティニック島を出航、ドミニカ島の西岸に沿って北進する。

セント・ルシアで監視していたロドネーは直ちに出航、スペイン艦隊との合同前に撃滅しようと、決戦を求めて追跡し、4月9日、フランス艦隊に接触、9日から12日まで交戦。

（9日から3日間は、風のない海面で艦隊運動を続ける）  
12日には最大の決戦となった。両艦隊は縦陣で対峙し、風上の位置を争った。ついにフランス側が風上につき、両艦隊は反航戦で砲火を交える。

イギリス側の先頭がフランス側の後尾を通過するころ、突然風向きが東から東南に転じる。イギリス艦隊の中央にあったロドネーは、直ちに面舵をとってフランス艦隊の中央突破に出る。後尾にあったフッドも同じ行動をとり、ド・グラス艦隊は2か所に分断された。

その後は乱戦となって、ド・グラスの旗艦ウィル・ド・パリ号は勇戦するが、ついに軍艦旗を降ろして降伏、ド・グラスは捕虜となった。フランス側は5隻を捕獲された。



# ネガパタムの海戦

1782年7月6日

# トリンコマリーの海戦

1782年9月3日

その後シュフランはバチカロアを出てオランダ領トリンクエバルにおもむく。

インド原地人と結んでフランスのインドにおける勢力を回復するにはインド洋の制海権を完全に得ることが必要であることを見てとったシュフランは、英艦隊の撃滅を決意、決戦を強要するため、マドラスとトリンコマリの間で交通線の破壊に出る。

ヒューズはこれを放置できず、6月、トリンコマリを出航してネガパタム港に入る。7月6日、シュフラン艦隊の出撃により、両艦隊はネガパタム南方で遭遇。

双方各11隻で戦い、決戦にはならなかったが、フランス側の優勢に終わった。戦闘終了後、英艦隊はマドラスに帰投。

フランス艦隊は、バチカロアに帰り、ここで本国からの戦列艦2隻、陸兵600人と合流、シュフランは14隻となる。

## (以上ネガパタムの海戦)

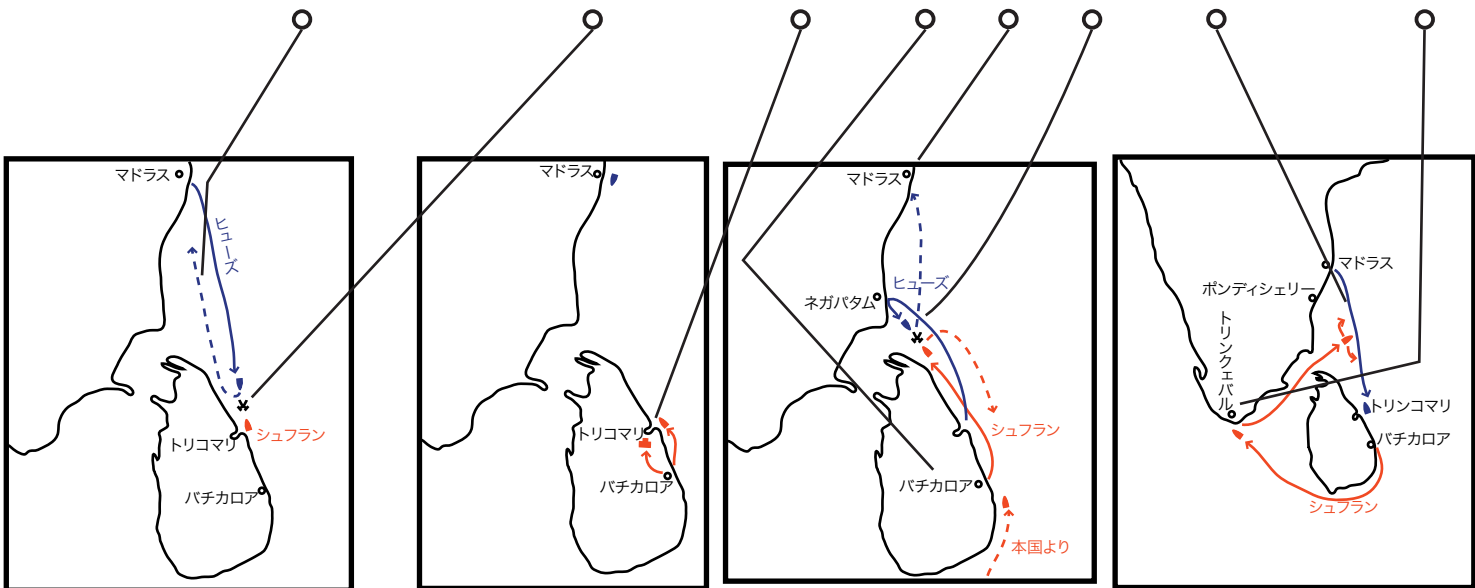
増援を受けたシュフランは直ちに陸兵を上陸、7月31日、海陸両面からトリンコマリを襲撃、奪取に成功した。

これによって、東インド方面のイギリスの勢力には打撃が加えられた。

ヒューズはトリンコマリ奪回のために、12隻でマドラスを出撃、9月3日、14隻のシュフラン艦隊と、トリンコマリ港外で戦うシュフランは、これを英艦隊撃滅のチャンスと考え、決戦を挑もうとするが、あせったためか、信号の誤認が起こって戦列に乱れを生じてしまった。

このために、決戦には至らなかったものの、ヒューズが優位に立つ結果となった。トリンコマリ奪回はならず、依然フランスの所有であったが、ヒューズは一応これでよしとしてマドラスに帰投した。

## (以上トリンコマリーの海戦)



# カダロアの海戦

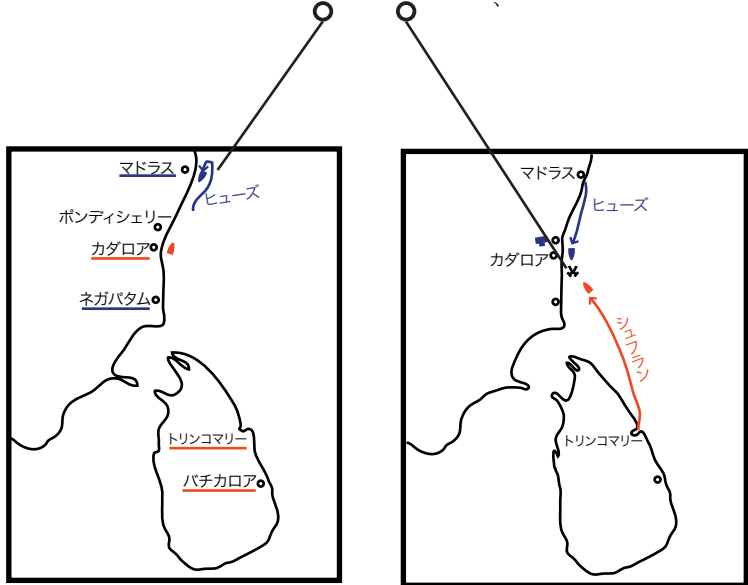
1783年6月20日

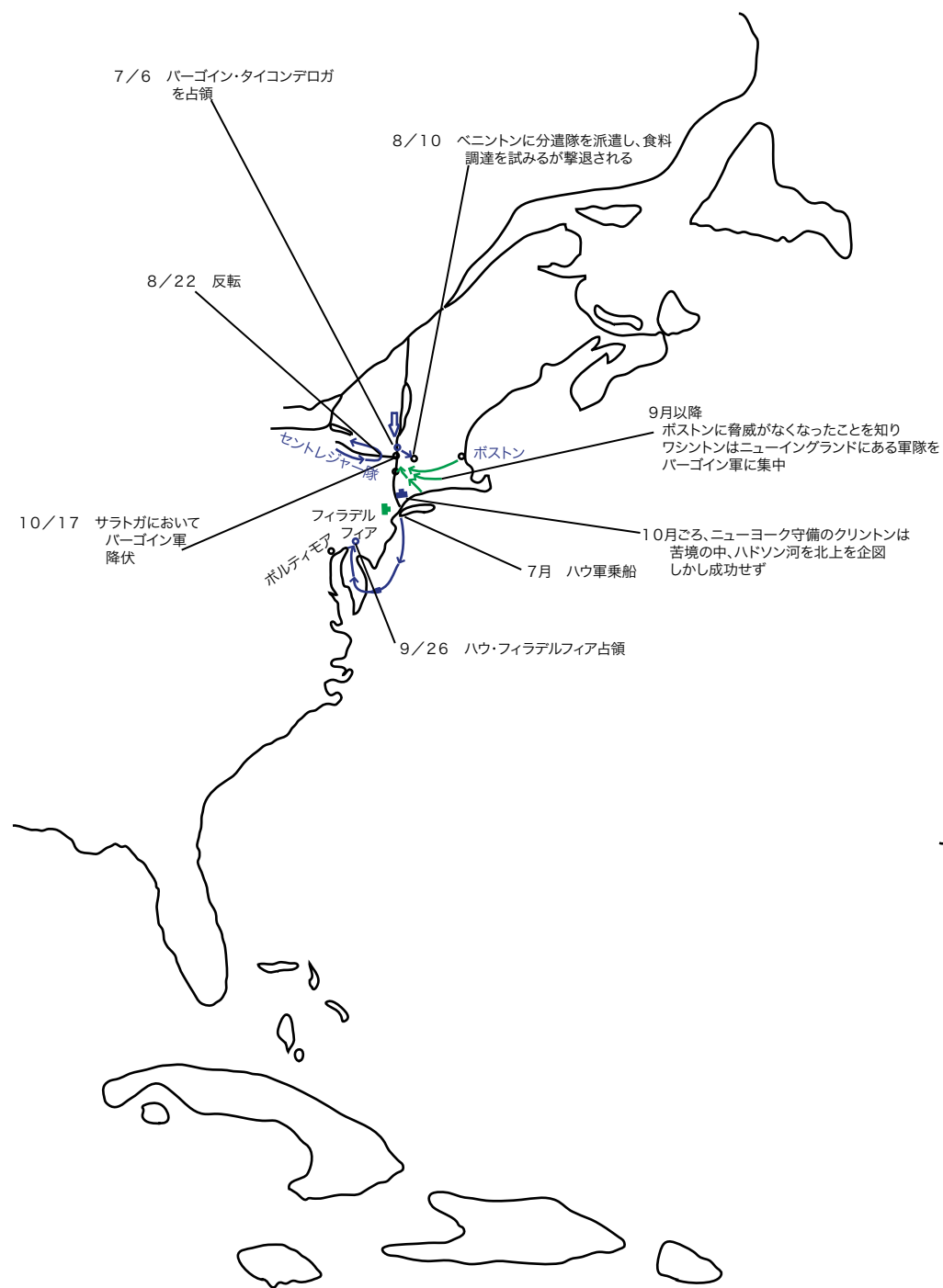
その後、英艦隊は本国からの増援を得て18隻の優勢となり、フランス艦隊は15隻となり、ブッスイがインド陸海軍司令官となったが、フランスの政策が悪く、陸軍はカダロアを保有するのみで、インドの王侯はイギリス側についていた。  
英軍はそのカダロアを攻略しようと、海陸両面から迫る。

シュフランはこれを知り、急いでトリンコマリを出航、1783年6月、カダロアに到着、陸兵と連絡、次いで附近の海上でヒューズ艦隊と戦う。(6月20日)

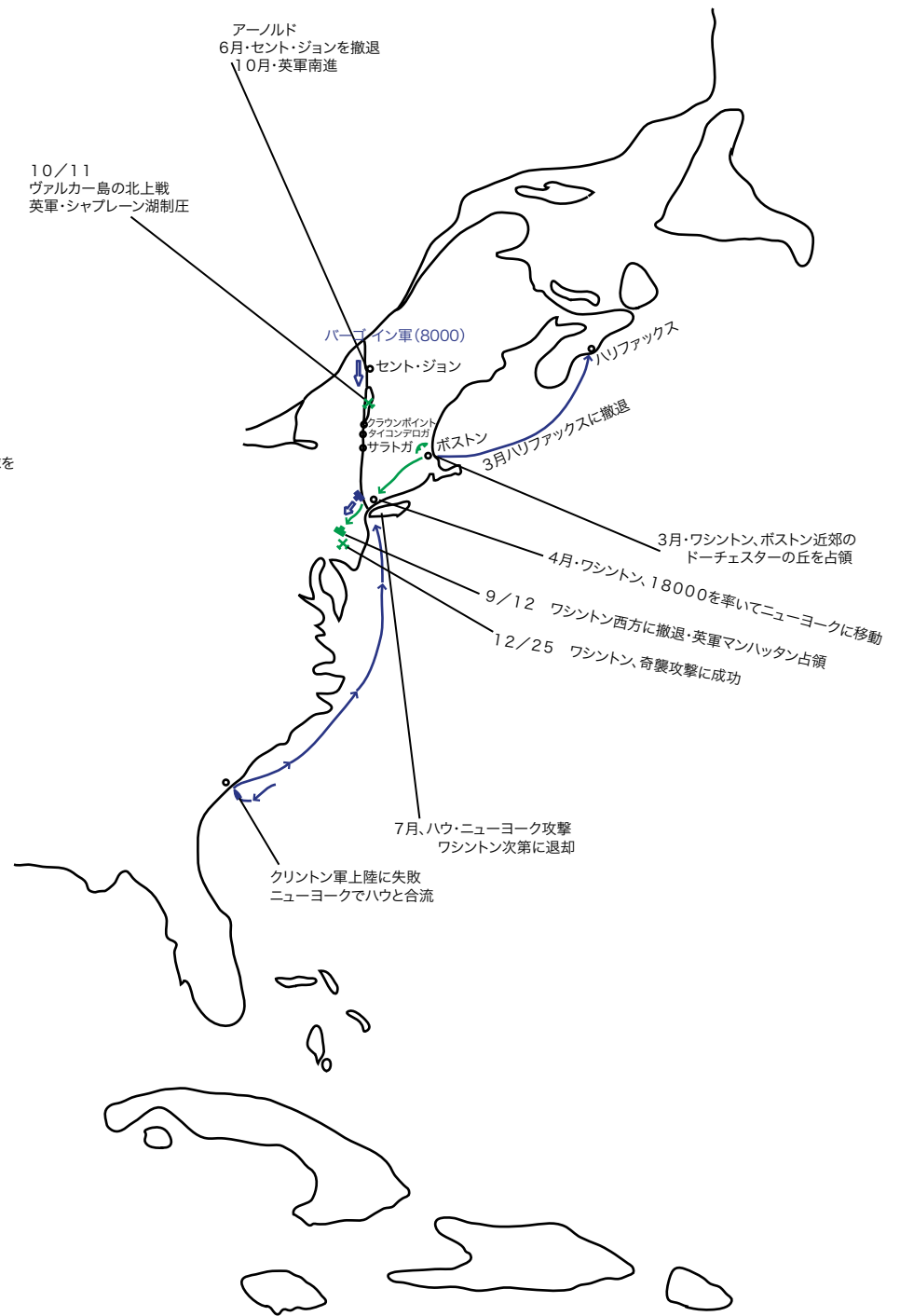
結果は非決定的だったか、英艦隊は戦場を離脱してマドラスに退却。

シュフランはカダロアに入港することができた。  
(以上カダロアの海戦)



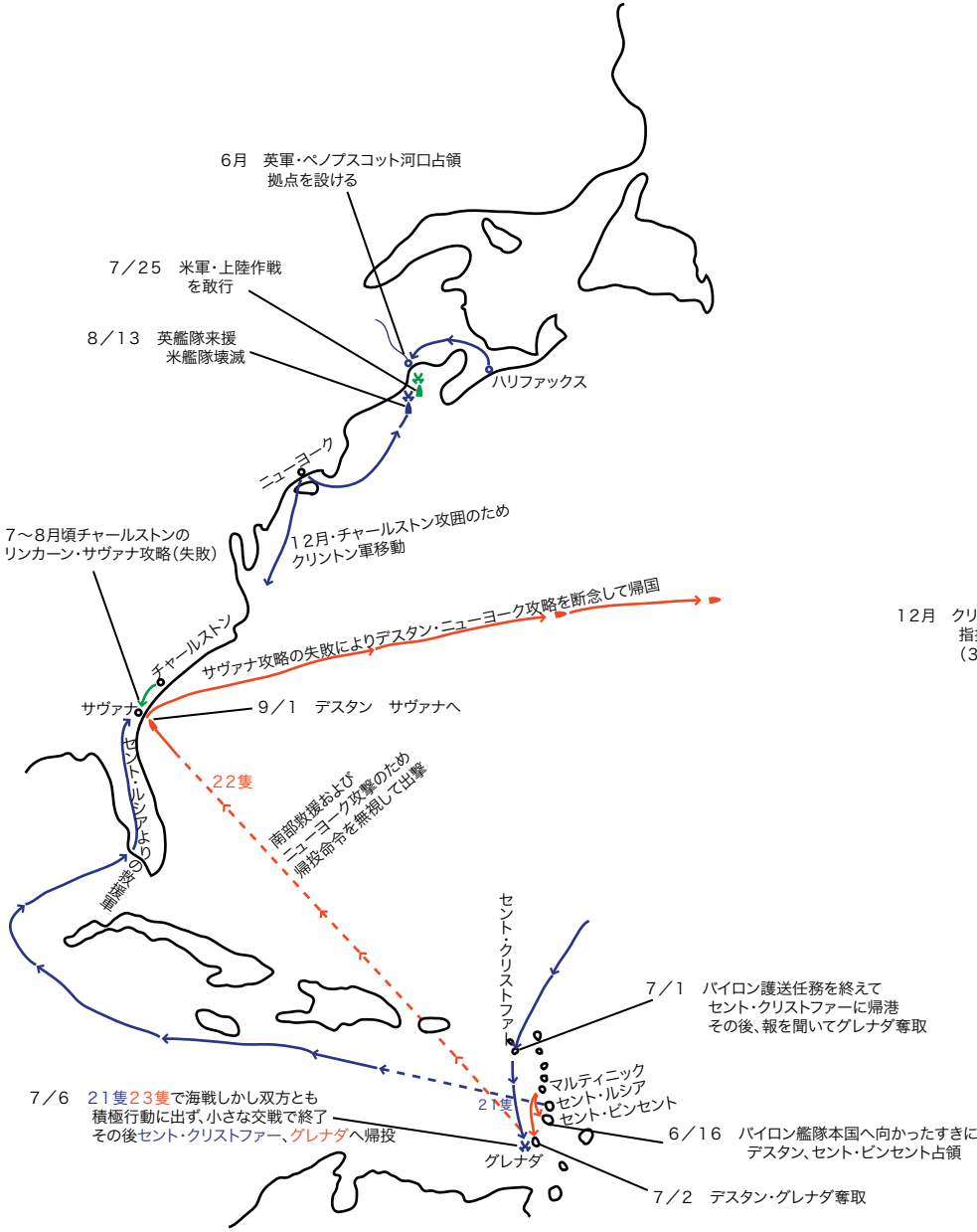


1777年

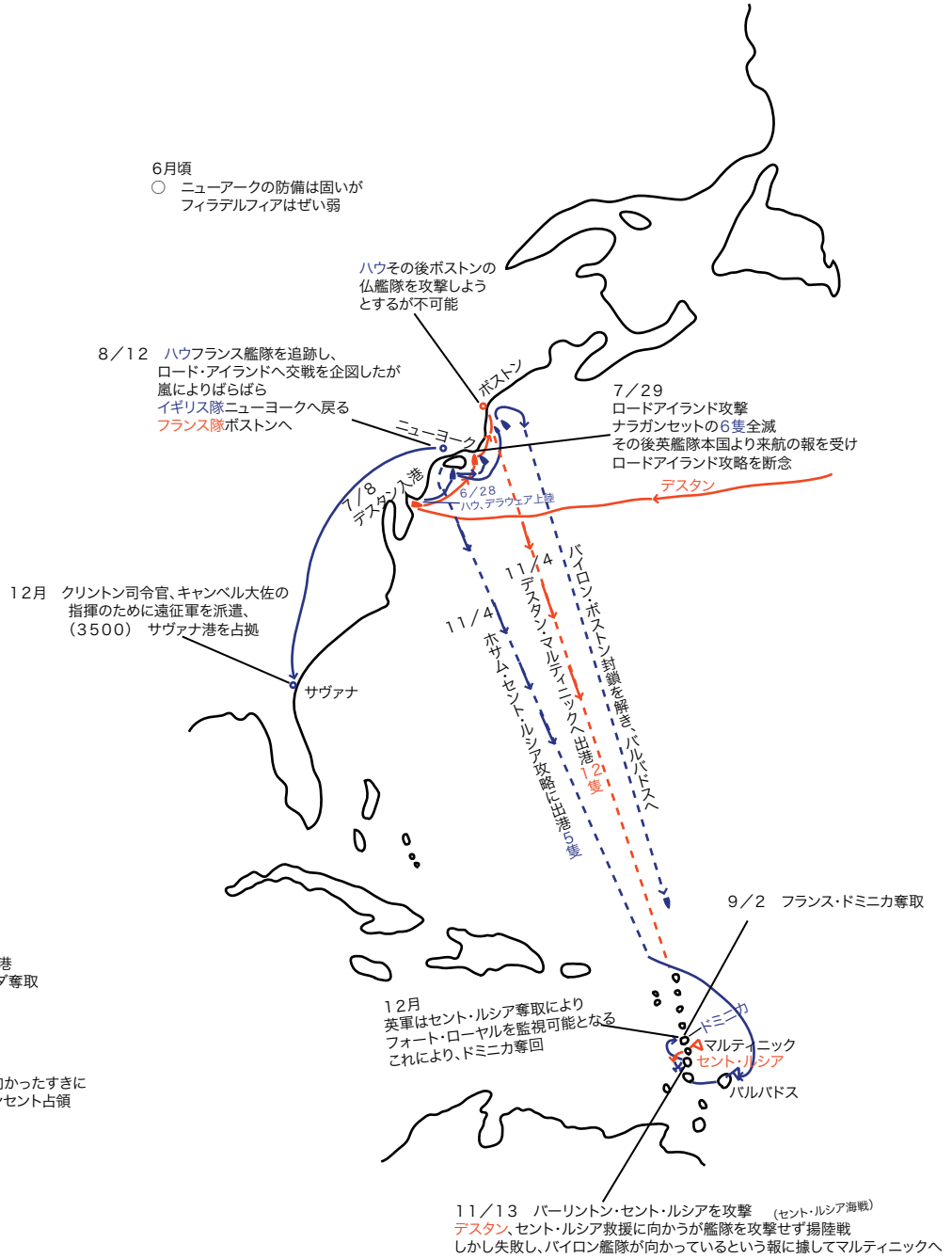


1776年

# 1779年

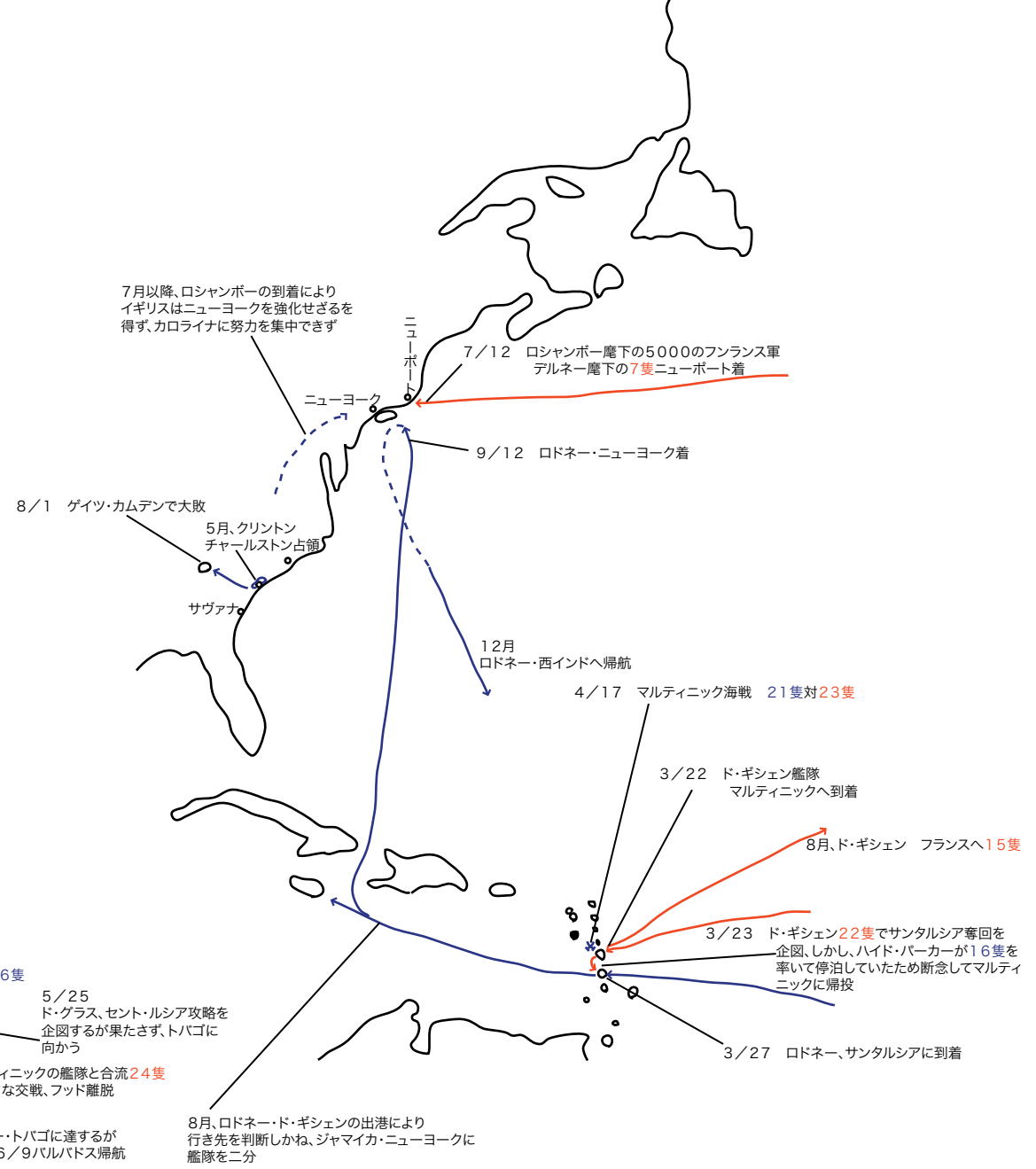
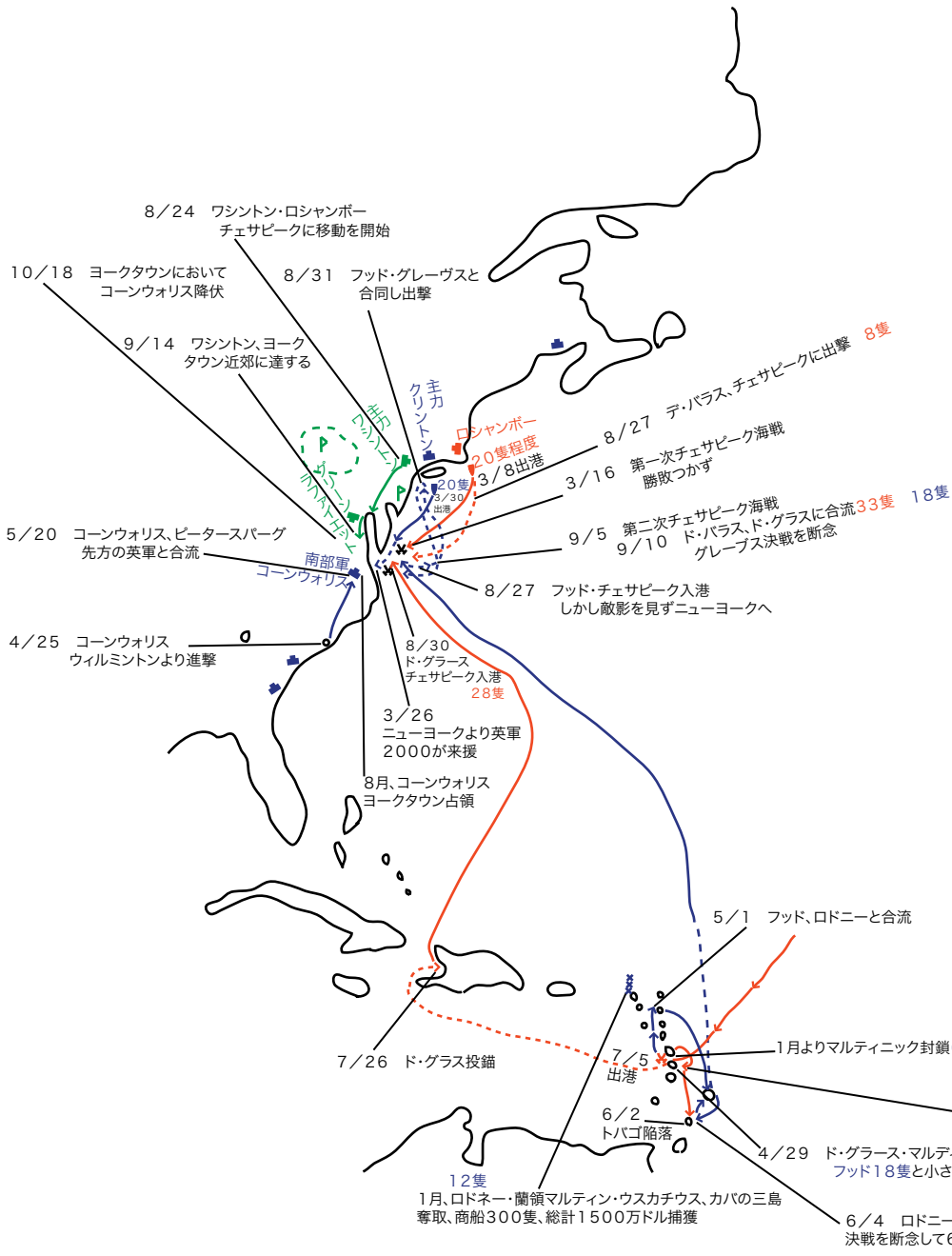


# 1778年

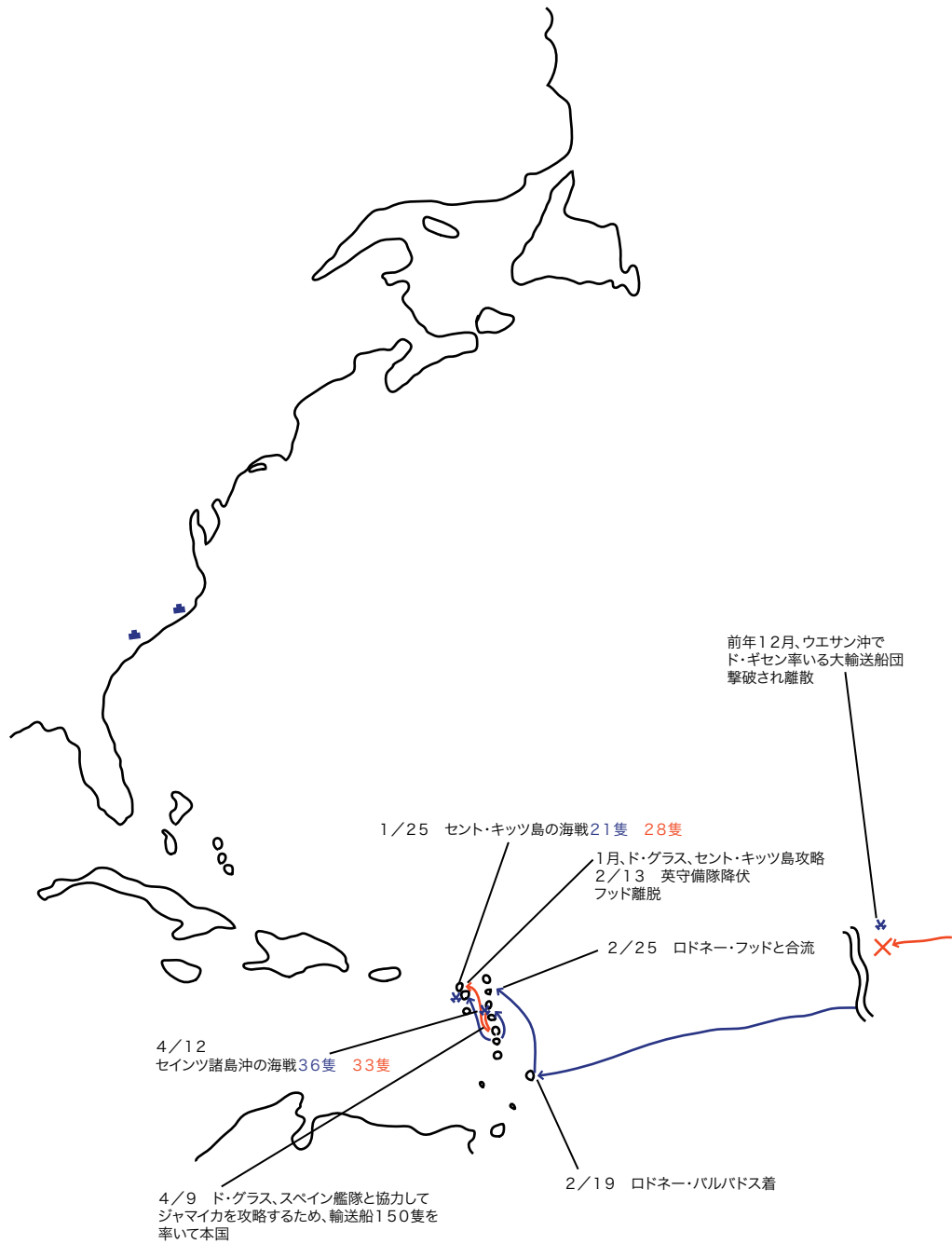
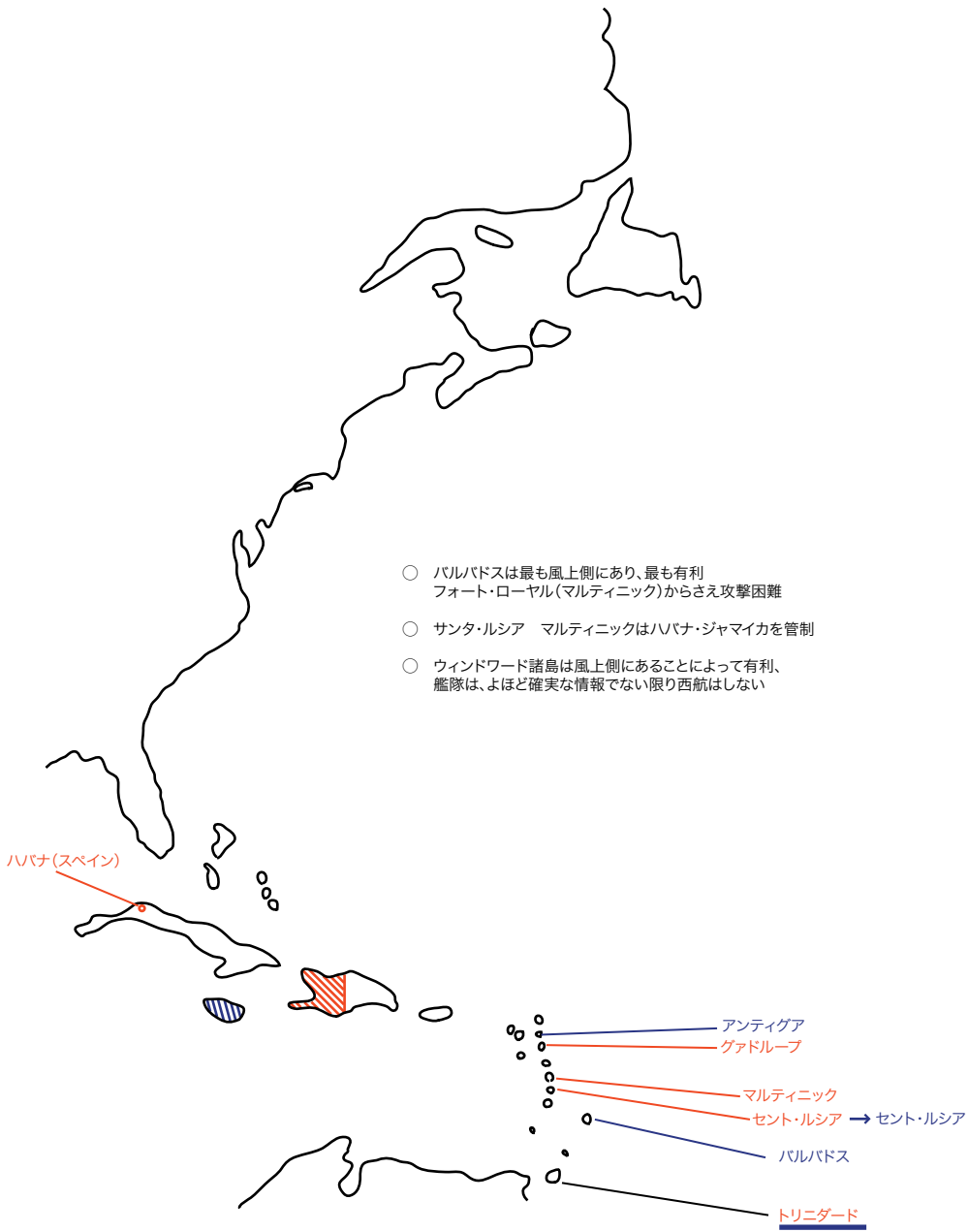


1781年

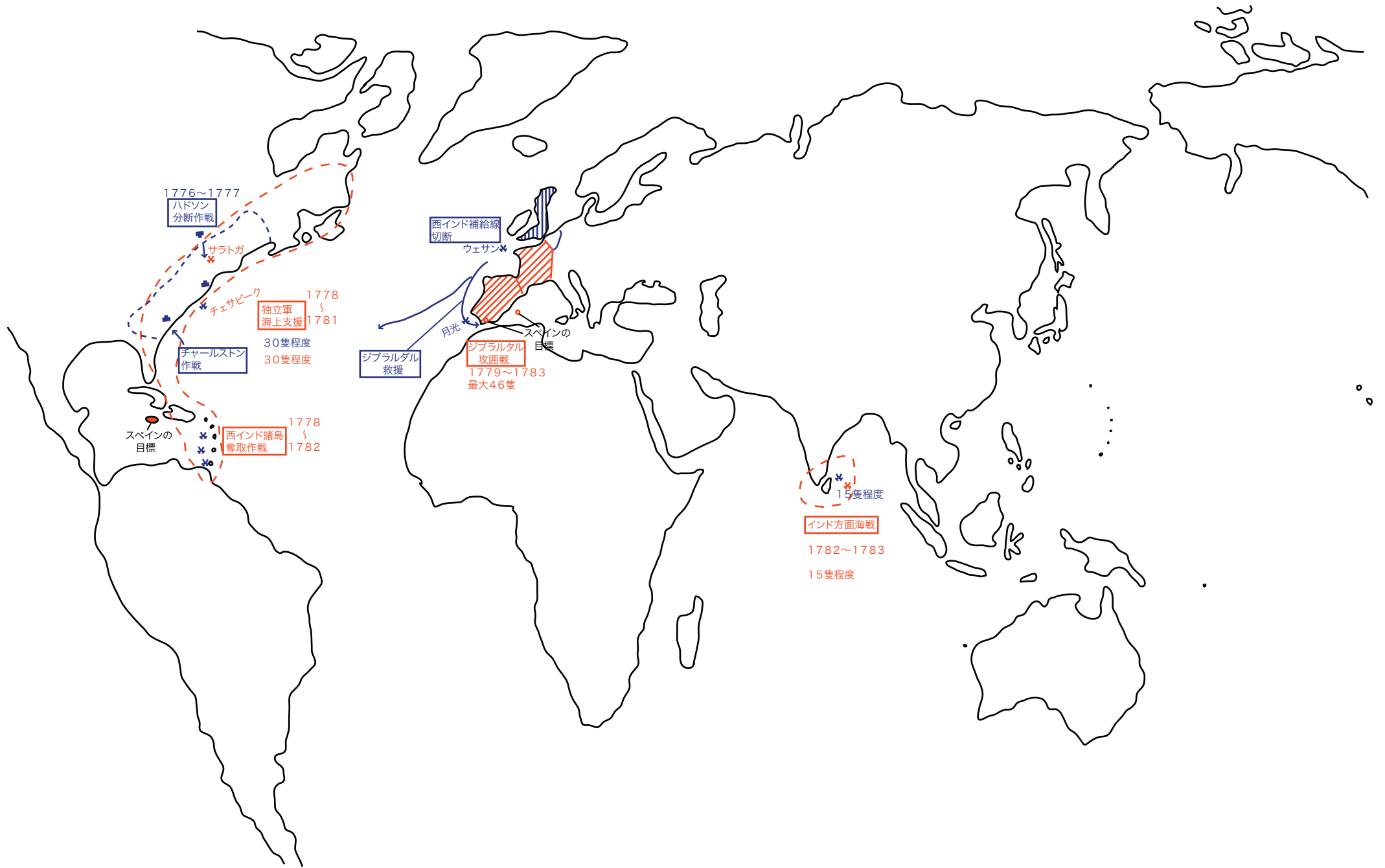
1780年



1782年

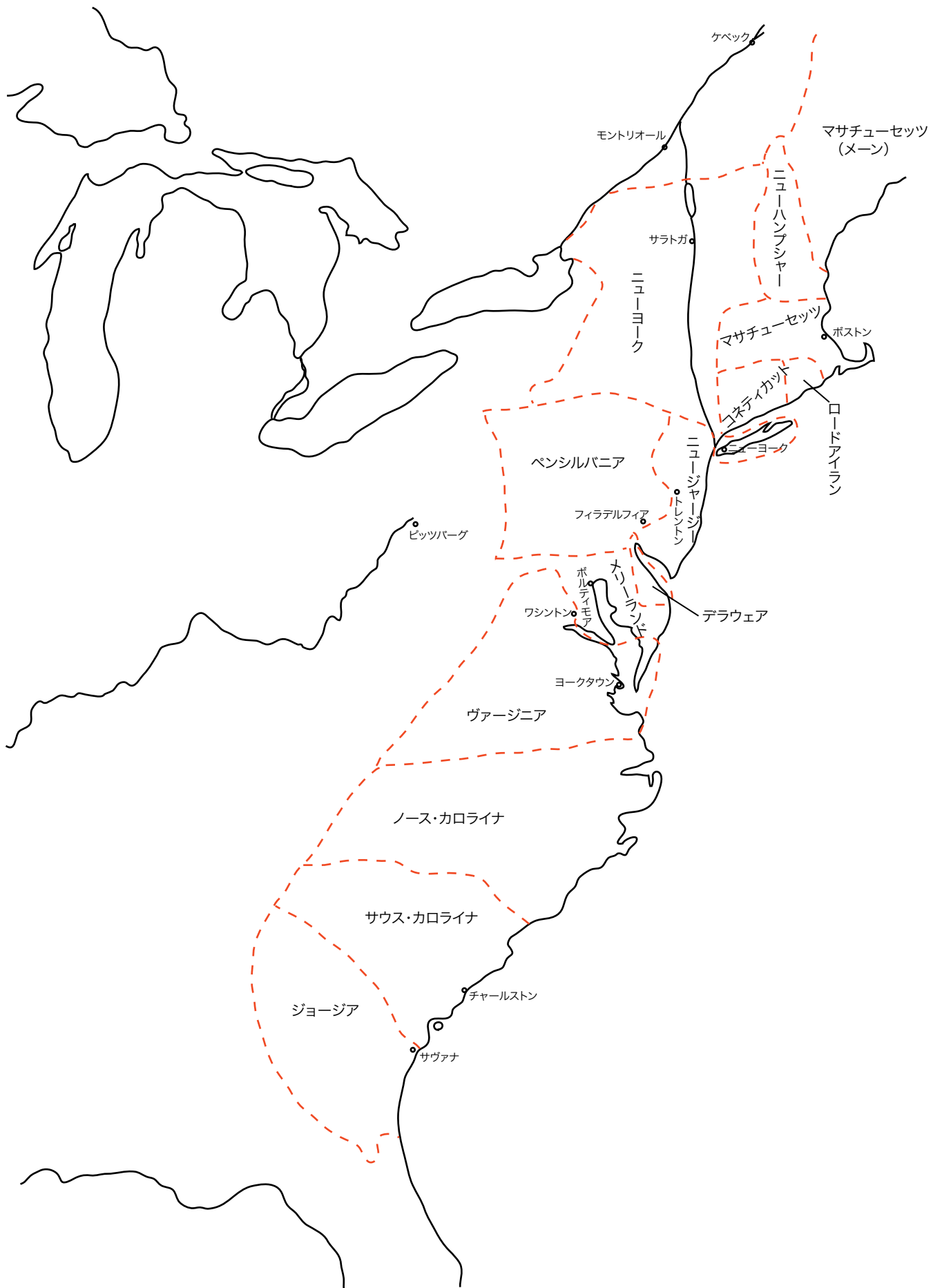












## 1 目的

イギリス	植民地喪失の阻止
アメリカ	独立の達成
スペイン	ミノルカ、ジブラルタル、ジャマイカの奪回
フランス	英領西インド・東インドの支配、および、十分牽制した後適当な時にアメリカを独立させること
オランダ	イギリスによってムリに引きこまれた。得るものは何もないため、早期終結が目的

### ○植民地の反乱の脅威

海外根拠地の鎖が欠けてしまう。アメリカ大陸の大西洋岸の一部、カナダ、ハリファックス、西インド諸島を結ぶ海軍根拠地が英国の手に残るか？

## 2 目標

チュルブーの主張、アメリカは独立しない方が良い。

理由、植民地が弱まるならば、英は植民地の力を失い、疲弊しなければ英は継続的にそれを押さえておく必要がある。要するにはれ物を切除せず、治もしない状態にしておくべきである。

○フランスの目的はアメリカを救うことではなく、イギリスに損害を与えることである。

それゆえ、アメリカ十三州はフランスの主要目標ではない。

## 3 作戦目標

同盟国側は、英艦隊の撃滅を主目標には選ばなかった。これが大した効果を持ち得なかった理由である。

スペインはジブラルタルに大兵力を指向することを主張し、結果的にイギリスから見ればジブラルタルは同盟国側大艦隊を牽制する役割を果たしたことになる。